

二次元ドリームノベルズ

18
未 満

蒼井村正
挿絵 / 或十せねか

新装版
呪詛喰らい師
カ ー ス イ ー タ ー

試し読み版

ゆきむら
雪村有佳
ゆか

咲妃のクラスメイト。
淫神に取り憑かれて
いるらしいが……。

ときわぎ
常磐城咲妃
さき

コースイター
「呪詛喰らい師」という異名を持つ少女。幼いころから退魔師としての修業を積んでおり、淫神を自身の身体に封じる使命を帯びている。封じた淫神の力は使うことが可能。一般常識が少し欠けていて、バレ句や猥談が好き。



い
わ
く
ら
し
ん
じ
岩倉信司

都市伝説研究部の部長。様々な怪異を追っているうちに、淫神の事件に巻き込まれる。

い
な
が
み
あ
ゆ
こ
稲神鮎子

学園の生徒会長。信司の幼馴染みで、いつも彼の事を気にかけている。

プロローグ		7
封の一	淫ノ根	17
封の二	淫水蝶	73
封の三	淫夢人形	132
封の四	^{インキュ} 淫吸バス	192
封の五	^{サバト} 淫校祭	243
封の六	小悪魔、再び	360
封の七	淫尾	424
封の八	淫蕩なる来訪者	468
封の九	濡妖	519
封の十	操神乱交	574
封の十一	淫人魔宴	626
封の十二	呪鼠	736
封の十三	オレの恋人がこんなに 淫乱なはずがない!	795
封の十四	淫虫跋扈	835
封の十五	妖銀貨	870
封の十六	久遠	924
エピローグ		1097

プロローグ

深夜の公園は、遊歩道から少し奥に足を踏み入れただけで、都会の真ん中とは思えぬ闇と寂寥せきりょうに包まれる。遠くからかすかに聞こえてくる街のノイズが、余計に物寂しさを煽り、闇を見回す視線は、つつい、光を探して上下左右に動いてしまう。

(……そろそろ見えてくるはずだな。「首くくりの樹」)

落ち葉を踏みしめて歩を進めながら、岩倉信司いわくらしんじは、学生服の上から羽織ったコートのポケットから、暗闇でも撮影可能な、赤外線モードを搭載したビデオカメラを取り出し、公園の奥にある一本の樹を目指して歩を進める。

通称、「首くくりの樹」と呼ばれるその樹は、樹齢百年は優に超える巨木で、過去に数件の首吊り自殺の現場となった、いわく付きの場所だ。

以前から、その木の周辺に、男の幽霊が出るという噂が立っており、信司はその真偽を確かめるためにやって来たのだった。

(百聞は一見にしかず。もし、首くくりの樹に本当に幽霊が出るっていうなら、オレの目の前に出てみやがれ！)

恐いもの見たさの好奇心を、いささか自棄^{やけ}気味の勇氣に変換した少年は、足音を忍ばせて闇の中を歩んでゆく。

「ウ……ウウウウ……ンンンンウウウンッ……」

いきなり、低く押し殺した男の呻き声が耳に飛び込んできて、信司の全身をギクリ！と強張せた。

（でっ……出た！ 本当に出たのかッ!? 証拠だ！ 証拠を残さないと……!）

急激に速まった胸の鼓動と、沸き起こる恐怖心を鎮めながら、ビデオ撮影を開始しようとするが、液晶ファインダーの開閉に連動して入るはずの電源が入らない。

「なっ、なんでだよ!? さつきチェックしたのに!？」

小さな声で毒づき、何度か操作を繰り返してみるが、公園に入る前に動作確認したはずのビデオカメラは、まったく作動しなかった。

（これってあれか？ 心霊スポットやミステリーサークルの内側で、電子機器が動作不良起こすっていう、あのご都合主義っぽい現象なのか!？）

動かなくなったカメラを持ったまま、信司は闇の奥に目を凝らす。

かすかな星明かりに巨大なシルエットを浮き上がらせた巨木の根本で、何か白いものが揺れているのが見えた。

(ホントに何かいるぞ……あれが噂の幽霊!?)

もっとよく見ようと、好奇心旺盛な少年は呼吸を整えて気配を殺し、極力物音を立てぬようにしながら、首くくりの樹に接近してゆく。

「ンフウウウム……ンウウウウ、アウウウウ……」

近づくにつれて、男の呻き声はさらにはつきりと聞こえ、闇の中で動いている白いものの輪郭も次第に明らかになってきた。

(幽霊!? いや、あれは……裸の女!?)

困惑の表情を浮かべて見つめる視線の先で、色っぽい曲線で構成された女の後ろ姿が、闇の中に白々と浮かび上がって小さく揺れ動いている。

(女の幽霊が出るなんて噂、全然聞いてないぞ……いや、あれは生身の女か?)

闇の中で小さく揺れる女の妖しく艶めかしい後ろ姿に見入ってしまいながら、信司はゴクリと生唾を呑み込んだ。

内側から白い燐光を放っているかのようにも見える、色白な背中と、長い黒髪が鮮烈なコントラストで暗闇に浮き出している。ウエストは芸術的なカーブを描いて細くくびれ、それに対してまるやかな曲面を張り出させた尻のポリウムはかなりのものだ。

プリッと丸く張り詰めた白い尻肌には染み一つなく、わずかな星明かりに艶々と輝きな

がら淫靡いんぴに揺れ動いている。

（丸裸ってわけじゃないみたいだな……でも、かなりきわどい格好には違いない）

こちらに背を向けているため、顔は見えないが、後ろ姿だけでも堪らぬ艶美さを放つ白い裸身には、带状のものが巻きつけられていた。

小さく揺れるまろやかな尻の谷間には、幅数センチほどの革の帯が食い込み、ムッチリと張り詰めた尻たぶを左右に分割している。同じような革帯は、女の胸にも巻かれており、圧迫されてわずかにひしゃげた乳肉の曲面が、腋の下からかすかに覗いているのがエロチックだ。

革帯は、胴部分だけでなく、男に跨がった腕や美脚にも巻きつき、全身緊縛のごとき倒錯的なエロチシズムを醸し出している。

（普通の下着じゃないよな？ ひよつとして、緊縛プレイって奴？ SMカップルの野外セックス現場なのか？）

自殺現場になったような場所で、何と不謹慎な……と思いながらも、好奇心旺盛な少年は、淫靡な光景についつい見入ってしまう。

「ムムウウウ……ンンンンッ……」

男の呻き声は、揺れ動く白い尻の下から聞こえていた。

革ベルトで裸身を緊縛した女は、仰向けに寝た男の腹に、背を向けた姿勢で馬乗りになり、両手で男の股間に奉仕しているようだ。

勃起ぼつきを握って扱き上げているらしい腕の動きに連動して、女の肘から二の腕の辺りが緩やかに上下しているのが見える。愛撫されている男性器は見えなかったが、その繊細で淫靡な腕の動きを見ているだけで、信司の若い牡器官も熱く硬く猛ってしまう。

「ンオオオオ……オオオオ……ンムウウウウウーン」

苦悶しているようにも聞こえる呻きを上げた男は、手淫奉仕を受けながら、下から手を伸ばし、女の尻やウエストのくびれを撫で回し、革紐で緊縛された豊乳を下からすくい上げるようにして揉みこねていた。

（オッパイ、結構大きいな……くそつ、好き放題に揉みやがって、羨ましいぜ！）

黒い指にこね回されている白く柔らかな肉果が、腋下のわずかな隙間から、ムニユリ、ムニユリと垣間見える光景に、男に対する嫉妬の感情が込み上げてくる。

乳房を揉みしだく男の指は、豊乳を巻き締めた革帯をずらそうとしていているようだが、革帯のガードは意外と堅く、目的を果たせずにいた。

愛撫を受けている女の方は、声を出すのを恥じらっているのか、喘ぎ一つ漏らさずに、男の股間を愛撫する繊細で淫靡な動きを黙々と続けている。

(ハッ……違う！ 断じて違うぞ！ オレはこんな卑猥な光景を覗き見るためにここに来たんじゃないんだ！ 幽霊がいないなら、とつとと帰らせてもらうぞ！)

眼前で繰り広げられる淫蕩いんとうな行為にしばし見とれていた少年は、ハッ！ と我に返る。

これ以上ここにいたら、覗き魔に間違えられてトラブルになつてしまひそうだ。

役立たずなビデオカメラをコートのポケットに収め、その場を立ち去ろうとした少年は、あることに気付いて、足を止める。

(待てよ……。何か変だぞ。なんで、あの男、あんなに真つ黒なんだ？)

女の姿ははつきりと見えているのに、揺れる尻の下に組み敷かれた男は、闇と同化した黒い影にしか見えない。男の黒い指が、女の色白な肌を這はい回る光景は異様にエロチックだが、あまりにもコントラストの差がありすぎるように思えた。

肌の色が黒いとか、そういう次元の黒さではなく、まるで、全身を墨で塗り込めたかのような漆黒で、さらに言うなら、肉体の厚みがまったく感じられないのだ。

ただ、黒い影だけが女の身体に張りついて卑猥うへめに蠢うごめいているようにも見える。

もう少しだけ接近して確認してみようと一歩踏み出した瞬間。

「オオオオオオオオオウウウウウウウウッ!!」

遠吠えのような声を上げた男の影が、女の尻の下で仰け反った。

馬乗りになつていた女の身体がフワリ、と浮き上がり、まるで暴れ馬にでも乗っているかのようにガクガクと上下に揺り動かされる。黒髪を振り乱した女は、上下に揺れる腹の上で巧みにバランスを取りながら、なおも勃起を扱き続けているようだ。

ボオオオウツ!!

呆気にとられて見つめる信司の眼前で、黒い影にしか見えぬ男の下半身が、突然、青白い炎に包まれた。

「うわ……ッ!」

思わず、小さな驚きの声を漏らした少年がなすすべもなく見つめているうちに、股間の辺りから沸き起こった青白い炎は、あつという間に男の全身を包み込む。

「ンホオオオオオオオオオウツ!」

見開かれた目と、絶頂の声を上げて大きく開かれた口からも青い炎が噴出し、これまで闇に沈み込んでいた男の全身を妖しく照らし出した次の瞬間、火にくべられた紙人形のように、灰と化した身体が、さらさらと小さな音を立てて崩れて地にわだかまった。

女の乳房を鷲掴みにしたままの指先にまで炎が到達し、指が消し炭のようにポロポロと燃え崩れてゆく。炎を噴き出す指に胸を掴まれたまままだというのに、女は熱がる様子もなく、燃え崩れてゆく男の上に跨がったまま、ゆつくりと両手を頭上に掲げた。

その手に握られているのは、まるで松明のように燃え盛る男根のようなもの。

「はああ……んはああ……ッ……」

それまでひと言も発しなかった女が、青白い炎を噴き上げる男根を頭上に掲げながら立ち上がり、惨劇の場にそぐわぬ色っぽい喘ぎを漏らしながら、顔を仰け反らせた。

わずかに立ち位置が変化したことで、女の横顔が視界に飛び込んでくる。

(う……うううっ、すっごい美人だ……)

うっとり目を閉じ、天を仰いで仰け反る女の顔に、信司は見とれてしまう。

年齢は信司ときほど変わらない少女であった。

キリリと細い眉、真っ直ぐに通った鼻筋、半開きで喘ぐ唇はやや厚めで色っぽい。

ツンと尖った顎あごから滑らかな喉へと続くラインは、繊細な鎖骨の輪郭と合流して、革帯で寄せられた胸の谷間へと続いている。可愛いと言うよりは、クールで凛々しい印象を与える、極上のプロポーションを持った美少女だった。

ポ……ポポポッ……シユウウウウンッ……。

女の手の中で男根が燃え尽き、周囲を再び闇が覆い尽くした。

掲げていた手を下げた女が、暗闇の中でゆっくりと振り向き、黒曜石のようなきらめきを放つ漆黒の瞳で、呆然ぼうぜんと立ちつくしたままの信司の姿を映し出す。

「ひう……ッ！」

脳が状況判断するよりも早く、身体の方が逃走を選択していた。

クルリと背を向けた少年は、全力疾走でその場から駆け出す。

（今、燃えていた男が幽霊だったらしいが、もしもリアルだったら……とんでもない猟奇殺人だぞ！ やべえ、逃げなきゃ、ヤバすぎるッ！）

学生寮に帰り着くまで、全力疾走は止まらなかった。

「封印の現場を見られた……？ この街での初仕事だったのに……」

温かな湯に満たされたバスタブに肩まで浸かり、シャワーから降り注ぐ湯滴を顔に浴びながら、少女はつぶやいた。

「強い好奇心を持って接近する者に、『忌避』の呪印程度では効果が弱すぎたか。私としたことが、迂闊だったな」

呆然と立ちすくんでいた少年の顔や服装を思い出し、少女は一人、浴室にやや低めの凍とした声を響かせながら反省を続ける。

「着ていた制服から所属校は割り出せる。情報収集がてら、学生やってみるのも悪くないな。どうせ行くなら、多生の縁があるところにしよう。フフッ♪」

学生服に身を包んだ自分の姿を想像し、小さな含み笑いを漏らした少女は、しなやかな裸身を伸ばして大きく背伸びする。まろやかなラインで構成された豊乳が湯面に浮かび上がり、シャワーの湯滴を弾き返した。

革帯の締めつけから解放された弾力たっぷりの果肉は、降り注ぐシャワーの刺激を受けて張りを増し、透明感のある薄紅色の乳首をツンと尖り勃たさせる。

「ンッ……ふううう……」

艶めかしい喘ぎを漏らした少女は、勃起した乳首をなだめるようにそつと撫で、乳球の丸みに沿って指を滑らせる。

よこしま
（邪な靈気の穢れは……抜けたか……）

淫らな指に揉みしだかれた乳房に残留していた、冷たく不快な感触が、温かな湯に溶け出して薄れてゆくのを感じながら、少女の指は自らの裸身を優しく撫で回している。

「時は、来た。この街の淫神、みだらがみ全て私が癒やし、取り込んでやろう……」

自分の肉体を愛でながらつぶやいた少女の目に、一瞬、哀しげな光が瞬き、すぐに消えた。

「……闇の中、我ら乗せ行く幽霊車、む、字余りだな」

唐突に一句詠んだ少女は、文字数を指折り数えながら唇を尖らせた。

「この状況で川柳か？ キミは肝が据わってるな」

「霊なるものに対するには、胆力は大事だぞ……むっ、来るか!？」

霊気が急激に強まったのを感じた咲妃の声と表情が、鋭さを増した次の瞬間。

ピキッ！ パキパキパキンッ！ 木材の軋むような音が、そこかしこで上がり始めた。

「う……なっ、何だ!? 何だよ、これは!？」

反射的にシートから立ち上がった少年は、怪音の鳴り響く車内を緊張した面持ちで見回しながら、声を上ずらせている。床板や、窓枠の木材部分から、樹の根のようなものがぞろぞろと伸び出し、車内の光景が怪しく変貌してゆくのだ。

「あまり好きになれぬ姿だが、仕掛けてきてくれたのはありがたい」

異様な変貌を遂げてゆくバスの車内でただ一人落ち着き払っている咲妃は、ゆっくりと立ち上がり、制服の上に羽織っていたブルゾンを脱いで身軽になった。

「こうなったら、窓を打ち破って脱出を……うわ、あれ、目ッ！ 目だ!」

脱出場所を探して車内を見回していた信司が、天井を指さして声を上げる。

彼の言うとおり、天井に設置されていた扇風機が、巨大な眼球に変貌していた。

血走った血管まで見て取れる、直径四十センチはあろうかという単眼がギロリ、と動いて二人を睨み据える。

「うくう……か、身体が……金縛り……!?」

拳を握り締めて身構えていた信司の身体から力が抜け、床にへたり込んだ。

一方、咲妃は金縛りに陥ることもなく、巨眼を真っ直ぐに見据えて悠然と立っている。

「御神体のお出ましか、さて、如何いか様な伽がお望みかな？ お好みのままに……」

数歩、歩み出た咲妃は、両手を広げて無抵抗の意を表しながら、艶然たる笑みを浮かべて問いかけた。

ピキッ、ピキピキピキンッ！

生木を裂くような音を立てながら上下左右から伸びてきた樹の根状触手が、無抵抗で立ちつくす少女の手足に絡みつき、しなやかな肢体を緊縛してゆく。

身体に絡んできた触手は、つい今しがた土の中から掘り出してきたかのような湿り気を帯びており、素肌にひんやりとした感触を伝えてくる。

制服越しに、バスの根本がギチギチッ！ と締め上げられ、たわわな美乳がさらに突出を際立たせられた。

細いウエストに幾重にも巻きついた樹の根触手の先端は、スカートの裾を大きくまくり

上げながら忍び込んで、ショーツに包まれたまろやかな尻たぶを撫で回していた。

「んっ！ く……う……。スカートめくりとは、感性まで四十年前のままなのか？」

あられもない緊縛姿を強要され、身体に食い入ってくる触手の痛みに小さく呻きながらも、咲妃は冗談を言う余裕を残している。

（まずは結縁の儀を執り行いたいが、淫神の核となっているのは、神格クラスの植物霊……木霊だな。これはなかなか厄介だぞ）

蠢く樹の根に全身を捌からめ捕られ、身動きできない状態に陥りながらも、神伽の巫女は、相手の素性を冷静に推察している。

長い年月を経て、神格を宿した樹木……木霊は、動物や人の霊とは思考形態や行動原理があまりにも異質であるため、意思の疎通は極めて困難だ。

（植物霊には、そもそも移動という概念が存在しないはず、それがどのような経緯で、バスの形状を取って徘徊しているんだ？ 木霊の神格が、死者の情念でどのように歪められているのか見極めるまで迂闊な行動はできないな）

緊縛が完了すると、それまで人形のように身じろぎもせず、座席に腰を下ろしていた少女達が、ゆつくりと立ち上がり、緊縛された咲妃のところに集まってきた。

少女を見つめる彼らの顔は、新聞に掲載されていた事故死者の顔写真と同じだ。

全員が制服を着用しており、今時の学生と比べると、少し子供っぽい印象を与える顔立ちをしている。しかし、ズボンの股間部分は、あからさまに勃起の輪郭を浮き上がらせ、彼らがもう子供ではないことを無言で主張していた。

（魂の緒が……木霊に繋がっている）

霊視能力に優れた咲妃は、少年達の後頭部から伸びた細いオーラの管が、木霊の巨眼に繋がっているのを見て眉を軽く顰める。

（バス型の淫神と少年達の霊は、不完全な形で融合しているようだな。ならば、少年達の霊を経由して木霊と意思疎通を図ることは可能なはず）

結縁の手段を考えている神伽の巫女を、少年の霊体はじつと見つめている。

咲妃の全身を樹の根触手が探り始めた。革帯ボンデージ巻きの美脚を這い上がった触手は、くすぐったい感触で太腿の筋肉をわななかせ、白いショーツに包まれた股間に到達した。

シユルツ……シユルツ……シユルツ……小さな衣擦れの音を立てながら、樹の根触手が、何かを探しているかのように股布の表面を撫で擦る。

根の表面に密生した繊毛がショーツの布地に擦れ、まるで毛足の長い柔らかな歯ブラシで優しく愛撫されているような搔痒感が、身動きできぬ少女の秘部を襲う。

「う……くふう……ンツ、ふあ……」

布越しに敏感な部分を刺激される、もどかしく妖しい快感に美貌を歪めながらも、咲妃は抗いもせずに樹の根の触診を受け入れていた。

ショーツの表面を撫で回していた妖根は、下着が邪魔だと判断したのか、器用にズリ下げて脱がしてしまう。

「あ……ッ！」

恥ずかしげな声を上げて身を振る咲妃であったが、手足は緊縛されていて抗えない。

細く引き締まった美少女の足首から、脱がしたショーツをスルリと抜き取った触手は、恥じらう巫女の身体をM字開脚の体勢で吊り上げ、制服のシャツをはだけた。

ほの甘い汗の芳香をフワッ、と香り立たせて、メリハリに富んだボンデージボディがあらわになる。

重力に挑むかのように突出した、見事な爆乳は、色白な乳肌を食べ頃の白桃の様に上気させ、それを深紅の革帯が飾り立てて、人外の存在さえも魅了するような色香を放っていた。

ポリウム過剰なバストとは対照的に、スリムに引き締まった腹部には、腹筋の凹凸がエロチックに浮き出っていて、汗に濡れてきらめきを放っている。

「くう！　ンンッ！」

見事な肢体をさらけ出して低く呻く少女の身体に、樹の根触手がザワザワと群がってくる。

節くれ立った触手は、無毛の恥丘を撫で、退魔装束の革帯を咥え込んだ秘裂の周囲を探り、薄革に浮き出たワレメをズリズリとなぞり上げて責め立てる。

女体の反応と触り心地に興奮したのか、触手の何本かは、その先端形状をペニスそつくりに変化させ、先端に形成された鈴口のワレメから、透明な樹液をトロトロと垂らし始めていた。

無意識のうちに握ってしまった樹の根触手も、ペニス状に変形し、濃い樹液を滴らせながら、指の輪の中でズリズリとストロークしている。

触手が垂らした粘液は、革帯ボンデージ姿の美少女の身体をたちまちの内に濡れ光らせ、桜色に上気した柔肌の表面をトロトロと流れ落ちてゆく。

ぬちっ、くちゅっ、にゅぷっ、ぐりっ、ずりりっ！

「ひうんっ！　んっ、はう……くうううンッ！」

粘りの強い樹液にぬめった亀頭状の先端部が、秘部を覆う革帯を軋ませながら、繊細な秘裂を上下に擦り責める。

秘部にピッチリと密着した柔軟な革帯は、その下に秘めた性器の輪郭ばかりか、勃起クリトリスのポッチまでもクッキリと浮き出させていた。

その敏感そうな突起が気になるのか、秘裂をなぞり上げている触手の先端が、時折、ツンツ、ツンツ、と探りの突きを繰り返してくる。

「ンツ！ ふあ、あッ、ひあうっ！」

バスの車内に、艶めかしい喘ぎを響かせ、淫神と化した木霊の触手に緊縛されたメリハリの利いた肢体が跳ねる。

植物とは思えぬ淫猥な動きで秘部を擦り廻られ、呪詛カリスィーター喰らい師の異名を持つ少女、常磐城咲妃は、美貌を切なげに歪めて喘いでしまう。

濃い樹液の匂いがする粘液をトロトロと垂らした樹の根触手は、深紅の革帯ボンデージに飾られた極上女体を検分するように這いずり、緊縛をさらに強めてゆく。

ぎゅるるっ……ぎちゅるっ！

「くあ……胸ッ！」

重力に挑むかのように突出した爆乳も、基部を巻き締められてさらなる突出を強要され、乳先を覆った革帯音をあつさりとずらされて、乳首を露出させられた。

(信司には、見えていないはず……)

真後ろで金縛りになつてゐる少年からは死角になつてゐることに、少し安心する呪詛喰らい師であつたが、次の瞬間には、まだ革帯に守られてゐる方の乳首を硬い樹の根触手にグリグリと押し揉まれて、美貌を仰け反らせてしまふ。

秘裂鬨りを続けられてゐるうちに、革帯に塗りたくられた樹液と、性器の奥から湧き出た愛液が触手の動きでこね回され、ヌチュヌチュと卑猥な音を車内に響かせた。

（あああッ、ダメだ、恥ずかしい、信司に聞かれてる！ イクッ、イクううッ！）

薄皮の退魔装束越しに秘部を執拗に擦られ、豊かな乳房を巻き締めて責め立てられ呪詛喰らい師の身体は、絶頂への階段を駆け上らされてゆく。

「くあ……あああッ！」

込み上げてくる絶頂の波に意識を持つて行かれそうになつた瞬間、触手の動きはピタリと止まり、お預けを喰らつた緊縛ボディが、切なげに振れる。

ムッチリと豊かなヒップがはしたなくせり上げられ、濡れそぼつて火照り疼く性器が収縮して、革帯の内側に、白濁した淫蜜を溢れさせた。

ミチッ……ギチュルルッ……。

滲み出てきた愛液の味と、そこに含まれる滋養成分を確かめるかのように、繊毛を密生させた樹の根触手がボンテージの内側に潜り込み膣口をくすぐり這う。

「ひゃふんっ！ うあ……くうううッ！」

強烈なくすぐったさに襲われた呪詛喰らい師の膣口がヒクヒクと収縮し、大量の愛液が漏れ出てきてしまう。

バスの車内に、甘酸っぱい愛液の芳香が、ムワッ！ と熱い湿り気を含んで香り立った。
(信司のところまで……私の匂い、届いている!?)

濃密に立ちのぼる恥液の匂いが、呪詛喰らい師の羞恥をさらに煽り立て、愛液の分泌量をさらに増してしまふ。

クチュクチュクチュルッ……。

美少女の分泌液をこね回す音がひときわ高まり、くすぐり責められている膣口の奥から、絶頂の予感が込み上げて来るが、恥辱の頂点に至る直前でお預けを食わされる。

「ハアハアハア……あああッ、また……!?’」

絶頂寸前で焦らし抜かれて悶える咲妃の肢体を嬲り抜きながら、淫神と化した幽霊バスは、漆黒の闇の中を疾走し続けていた。

愛液をたっぷり味わった樹の根触手は、幾重にも枝分かれして性器全体を包み込んだ。閉じあわされた大陰唇に微妙な力が加えられ、柔らかな女陰が、くばあ……と左右に割り開かれ、革帯ボンテージを咥え込まされる。

「ひあ！ う……革帯の庇護も神の前では役立たずか……はあう……く……あつ！」

巫神程度の霊力ではずらすことのできない革帯の下にあっさりと侵入した木霊の触手は、冷たく湿った繊毛で大陰唇と小陰唇の隙間を這い進み、濡れた膺前庭をサワサワとくすぐるように弄ってくる。

四人の死者と、一人の生者に見られながら、恥悦の身体検査は続く。

（この程度の愛撫、何度も受けて、耐えてきたはずなのに、あいつが……信司の視線が気になる……なぜだ？）

樹の根に秘部を弄られる快感に耐えながら、神伽の巫女は今まで感じたことのない感情の揺らぎを覚えている。この痴態を信司に見られている……そう思っただけで、胸の奥が妖しくざわめき、うなじの辺りが熱を帯びてチリチリと疼いてしまうのだ。

（気にするな！ 今は神伽に専念するんだ……）

そう思ってはみるものの、木霊に嬲られる自分の姿を、背後にいる彼がどうという表情で見つめているのか、気になって仕方がない。

振り向けば、少年の様子を確認できるのだが、なぜかそれもためらわれてしまう。

「はあ……う……んっ、く……ンッ！」

繊毛触手の動きは、愛撫と言うよりは単なる探索行為のようであったが、毛足の長い濡

れ筆で刷子撫でられているようなもどかしくむず痒い感触は、敏感な部分に快感の波紋を沸き起こらせ、少女の性器を熱く、甘く疼かせた。

さらに密度を増して性器を弄る樹の根の動きは、幸いと言うべきか、信司の視界には入っていない。

しかし、M字開脚で吊らされた尻たぶの緊張や、くすぐったい快感に耐えきれぬ太腿の痙攣は、少年の目にしつかりと捉えられているはずだ。

催眠の呪印で眠らせておくべきだったか……と後悔しても、後の祭りではない。

性器の外周部を一通り探查し終えた繊毛触手は、湿り気を増した膣口周辺を探り、内部にまで浅く潜り込んでくる。

「くふう……はあう……ひぁ！　そこ……挿れ……たら……きゅふう……ッ」

柔らかな繊毛に直接撫でくすぐられた膣口が熱を帯びて濡れ、触手の先端を挿入された尿道口に鋭い排泄欲求が沸き起こる。

じゅわ……わずかに漏らしてしまった尿水の潤いを感じた瞬間、バスの車内を覆い尽くして伸びた妖根がゾワゾワとざわめき、無言で立ちつくす少年達の身体もそれにあわせて前後左右に揺れた。

（植物の本能が滋養を欲しているのか？　神伽の巫女として、与えるのはやぶさかではな

いが……信司に排尿の様子を見られるのは、さすがに恥ずかしいな)

背後で見ている少年に、排泄していることを悟られまいとする咲妃の困惑をよそに、滋養に満ちた尿水の源泉を探り当てた樹の根触手は、密生した繊毛を蠢かせて尿道粘膜をくすぐりながら、排尿経路を逆行してくる。

「きゅふううんっ！」

ツーンと鋭い異物挿入の感触が尿道を一気に貫き、膀胱にまで到達した。

(ああつ！ 漏れる……ッ！)

言葉には出さなかったものの、強制的に尿失禁されられる羞恥で、桜色に染まった美貌が歪み、樹の根に緊縛された肢体が強張ってわななく。

「は、あ、ああああ……んふううう……ッ」

眉を寄せ、小さな声を上げた少女の下腹が、筋肉の輪郭を浮き上がらせて緊張し、樹の根に撫でくすぐられた美脚が宙でガクガクと痙攣した。

しかし、咲妃が心配していた尿水の噴出は起きなかった。

膨れあがった樹の根が尿口に栓をしているため、強制排尿で迸りかけた小水が出口で塞ぎ止められているのだ。

ジュルッ……チュルッ……チュルチュルチュルッ……。

じわり、じわりと岩清水のように漏れ出てくる尿水を、小刻みに脈動する樹の根触手が残らず吸い上げてゆく。

「んっ、んふううう……はあはあはあ……ひう……くふううう」

下腹の緊張を緩めることができぬまま、退魔士の少女は、膀胱内にまで進入して尿水を掻き回しながら蠢く繊毛の異様な感触に耐えている。

（吸われている……膀胱の中……全部……くうっ！）

尿水吸飲の異様な快感にモジモジと切なげに蠢いてしまう下半身を、何とか制御しようと試みる呪詛カースイーターらい師であったが、尿道と膀胱内で蠢く繊毛触手は、強烈すぎる尿意と、異様な快感を湧き起こらせて、恥ずかしい身悶えが止められない。

チュルッ……チュルルルッ……クチュクチュクチュッ。

小さな吸飲音を立てながら、繊毛触手は敏感な尿道内を弄り、さらなる滋養を要求するかのように、膀胱壁を掻きくすぐって刺激してくる。

（ダメ……だッ！ イクッ！ イッてしまうッ！）

じつくりと焦らし抜きながらの強制排尿快感に屈し、絶頂の予感が込み上げて来るが、陰の絶頂波動を嫌う樹の根触手は、その瞬間に動きをピタリと止めて、寸止めでの切なさで神伽の巫女を悶えさせてしまう。



包帯を巻かれたミイラ男の肉棒が唇に押しつけられ、有無を言わせず喉奥にまで突き挿れられた。カビ臭さと、乾いた腐肉の入り交じった悪臭が鼻腔を突き抜け、精液にまみれてもなお凛々しさを失わぬ美貌を汚辱に歪ませる。

「アアアア、濡レテ、温カデ、氣持チイイ口マンコダア」

「ぐふつ、んぐう……んっ、ぐうう……ごほおッ！」

一気に食道入口まで蹂躪されて、激しく咳き込み苦悶する少女にはお構いなく、ミイラは欲望に突き動かされるがままに腰を振って、温かく潤んだ口腔を犯し抜く。

ぐふつ、ぐふつ、くちゅ、ずちゅ、ぐちゅつ……フルストロークの抜き挿しのたびに、肉柱に巻きつけられた目の粗い包帯が、喉粘膜をゾリゾリと擦り、食道入口にスッポリとはまり込んだ亀頭が、強烈な嘔吐感おうとを沸き起こらせる。白く細い咲妃の喉には、食道を蹂躪しながら抽送される怪ペニスの姿が、くつきりと浮き出ていた。

「んぐうう！ ゴホッ、ゲッ、んふううう、ゴホオ、ぐうううう、んんっ！」

グチュグチュと恥ずかしい音を立てて犯される唇の狭間から、泡立てられた唾液がこぼれ出し、喉を伝って爆乳の曲面まで垂れ落ちてゆく。

（ぐう！ なっ、何だ？ イチモツが、大きくなっている……喉が裂けるっ！）

清浄な芳香を立ちのぼらせる巫女の唾液を吸い込んだ乾燥ペニスには、喉粘膜をギチギチ

と押し広げながら体積を増し、ボンデーシ緊縛された極上裸身を窒息感で痙攣させる。

「キシシシッ！ オマエノ涎デ、オレノ乾燥チンポガ甦ッタゾ！」

ジュポツ、と音を立てて咲妃の口から勃起を引き抜いたミイラ男は、水分を吸収して生々しく復活したイチモツを見せつけた。激しいイラマチオで包帯が解けて露出した男根は、ゾンビ達のそれよりもおぞましい黒色をしており、先端のワレメから、茶色つぼく濁った先汁を滴らせる腐肉棒だ。

「うくう……そんなモノが、私の口に……んっ！ んぐうううううう！」

嫌悪に顔を歪める少女の口に、醜悪な肉凶器が再び突き込まれ、激しく喉を犯す。

「ガフウウウッ！ オレモ犯スッ！ メチャメチャニ犯シテヤルゾ雌豚メエ！」

イラマチオに苦悶する咲妃の姿に興奮した狼男は、精液に濡れまみれた身体を背後から抱き締め、股間に毛むくじやらの怒張を押しつけて腰を振る。革帯緊縛された爆乳が、突き上げの衝撃で残像を描いて揺れ弾むほどのハードな素股責めだ。

「んぐううっ！ んおおおおっ、んむううううんっ！」

性欲に狂った獣人は、苦しげに呻く少女の裸身を獣のパワーで揺さぶりながら、ブラシのような獣根を激しく擦りつけてくる。圧迫された恥骨が軋み、膣口を守る唯一の防壁である薄革ボンデーシが、剛毛ペニスに押されて、秘裂に深々と食い込んだ。

ゾリッゾリッ、ジュリッ、ギチュッ、ギチュッ……剛毛の摩擦音と、革の軋む音を交互に立てて、無毛の秘裂をオオカミのペニスが擦り罫る。

一本の紐のようになって陰唇に啜え込まれた革帯の頂点では、刺激に反応して勃起してしまったクリトリスが、小さなポッチを浮き出させ、野獣の龟头冠に掻き弾かれてプルプルと震わされている。

(退魔装束が……食い込んで……恥骨が砕けてしまいそうだッ！)

「グフルルッ、マダマダコンナモンジャナイゼッ！」

抱きかかえた裸身から伝わる苦悶の痙攣に野獣の血を沸き立たせた狼男は、剛毛ブラシ状のペニスをさらに強く押しつけて腰を振った。

「んぐううっ！ あぐうっ、ごふっ！ ゴホッ！ ぐむう……んおあうんんくッ！」

刺激が強烈すぎて、苦痛にしか感じない素股責めに、精液まみれの美貌が歪む。

女性の身体のことなどまったく気遣っていないかのような凶暴な責めに、神伽のために鍛えられた白い裸身が軋み、快感と呼ぶにはほど遠い衝撃が、擦り責めされる性器を立て続けに襲う。

他のモンスター達を一刻も早く射精させねばならないのだが、イラマチオの窒息感と、秘部をハードに擦り責められる衝撃で身体の自由が利かなくなりつつある。

「チンポ、手コキ……タマ、揉メ！」

ゾンビの一体は、たどたどしい口調で言いながら、青黒く変色した腐肉柱を呪詛喰らい師に強引に握らせて、手淫奉仕を強要してきた。

「ゴホッ、ぐ……う……ぐふううう……はう……んっ、ゲホッ、んむうッ……」

イラマチオと素股で同時に責められながらも、神伽の巫女は震える指で死者の勃起を愛撫する。亀頭先端から滲み出る、黄色く濁った先走りを怒張全体に塗り込み、大きく膨れあがった陰囊を優しく揉みほぐすと、立ちのぼる腐臭が濃くなった。

(こいつら……精液まで腐ってるのか？　こんなのを顔に出されたら……)

揉み指に重く粘り着いてくる肉袋に溜まった、ドロリとした腐液の感触が、射精に対する嫌悪感を煽り立て、咲妃の美貌を曇らせる。

「オレハ、コノデカ乳ヲ犯スウウ！」

もう一体のゾンビは、青紫色に壊死した巨根を、胸の谷間に挿入してたわわな乳球を犯す。氷のように冷たい死者のペニスは、温かく柔らかな肉果を削り取らんばかりに摩擦し、強張った指は爆乳を荒っぽく揉みしだき、革帯越しにポッチを浮き出させた乳頭をきつく摘まんでグリグリと揉み転がした。

「くあ、そこお……くふううっ、んっんっんっ、はあうううっ……！」

刺激を受けた乳首がジワリ、と母乳を滲ませ、革帯の緊縛が弛んだ。

「ンオオオツ、乳首、見セロオ！」

退魔装束の弛みに気付いたゾンビの指が、かろうじて乳先を守ってきた薄革の防壁を、ヌルリ、とずらし、隠されていた先端を剥き出しにする。

メイド喫茶での授乳試練以来、むず痒い疼きの収まらぬ乳首が、乳汁に艶めかしく濡れ光って、ピヨコンツ！と飛び出してきた。絶好の攻撃目標を見つけた生ける死者は、親指の腹で、鮮やかなピンク色に充血した勃起乳首をグリッ、ゾリッ、と撫で転がす。

「くひあ！んあつ、ヒッ、ふおおおううう〜ンツ！で……るうううツ！」

プシイイッ！プシユルウウツ！甘く引きつった声を上げた咲妃の乳首が小さなペニスのように脈動し、純白の乳汁を迸らせた。

「グヒヒイ……淫ラナ雌豚ダト思ツタラ、乳牛ダツタカ！」

枯れ木の軋むような渴いた笑い声を漏らしたミイラ男は、喉を犯す腰の動きを速めながら、射乳痙攣中の乳首を摘んで揉み上げ、布地に包まれた指先で、とりわけ敏感な先端を掻き擦って責め立てる。目の粗い布地にゾリゾリと擦られた勃起乳頭は、止めどなく母乳を噴き出して、ミイラ男の包帯をグツシヨリと湿らせた。

「グルルツ、コノ雌豚、オレタチニ嬲ラレテ感ジテイヤガルゼ！」

あからさまな反応に狂喜した狼男は、舌なめずりしながら腰使いをさらに速める。

獣のペニスと恥骨の間に挟まれた勃起陰核がギチギチと圧迫され、獣毛に覆われた狼男の下腹が、咲妃の白くまるやかな尻肉を打ち震わせて叩きつけられる。

膣内への挿入こそされていけないものの、端から見ている者にとつては、悲痛な獣姦陵辱の光景が延々と続く。

「ガフウウ！ コツチノ乳首ハ、オレガ舐メテヤロウ」

無尽蔵の体力を見せつけて素股責めを続けながら、狼男は長い舌を伸ばして、反対側の乳首をレロレロと舐め転がして責め立てる。

「ひううっ！ んっ、んんっ、きゅううううんっ！」

ざらついた獣舌に舐めしゃぶられた勃起乳首は、たちまちのうちに甘美な痙攣を起こし、甘く温かな乳汁を噴き出して、陵辱獣の喉を潤した。ブラシ状の獣根に擦られた秘部も、熱い恥液を溢れさせて、素股責めを続ける毛むくじゃらの肉凶器を濡らす。

「オアアアア、オレモ、挿レ……タイ」

ゾンビの一人が、咲妃の美脚を覆ったタイツの隙間に腐肉棒を突き挿れて抽送する。薄革のコスチュームと滑らかな太腿の間に挟まれて擦られた勃起は、膿のような先汁をビュルビュルと溢れ出させ、ヌチュヌチュという卑猥な淫音を立てた。

ぐちゅぐちゅぐちゅぐちゅつ！ 股間からも、はしたない摩擦音が上がっていた。

愛液を吸って重く濡れた革帯は、既に秘部を守る役割を放棄しており、毛むくじやらのペニスの前後動に巻き込まれて振れ、引きつって、濡れ革の軋むギチュギチュという音を立てながら、守るべき勃起陰核に絡みつき、責め立ててくる。

「オマンコガビクビク震エテイルゾ。痛メツケラレテ感ジルナンテ、マゾ雌豚ダナ」

言葉責めを交えながら、狼男は腰をグラインドさせ、剛毛が密生した肉柱で性器全体をこね回す。激しい摩擦を受け続けて充血度を増した大陰唇は、痛々しいほどの紅色に染まり、牡と女の体液に艶めかしく濡れ光っていた。

「くうううつ！ んふううつ、ふあ、ゴフツ、ぐ。うぐううつ、んっんっんっ！」

唾液を吸って硬度と太さを増した腐肉勃起に犯される喉奥から、鼻に掛かった甘い呻きを絞り出された神伽の巫女は、ボンデージ姿の白い裸身を辱悦感に震わせた。

（怒りの視線を感じる……こんな無様な姿を……信司に見られている。くそっ！ なぜ、こんなに胸がざわめく？ どうしてあいつのことが気になるんだ!! ……どうして、こんなに哀しいんだ？）

モンスターどもに嬲られながら、咲妃は自分でも説明の付かない感情のうねりに戸惑っている。幽霊バスの一件以来、互いの間に生じてしまったぎこちないものを解消する間も

なく、あの時の光景をさらに悲惨な形で再現するかのような状況で、異形のペニスに奉仕し、犯されているのが、悔しく、そして哀しい。

（今は、どんな屈辱にも耐えるしかない。こいつらを射精させれば……この恥辱は終わるんだ。それが、神伽の巫女の責務……ッ）

友人達の眼前で繰り広げられる陵辱劇に終止符を打つべく、神伽の巫女は、押し寄せる快感と、込み上げてくる屈辱感に耐えて奉仕に没頭する。

「んふ、んむっ……ちゅば、ちゅぽっ、くちゅくちゅくちゅくちゅっ……あふ、あむ、んんんっ、じゅるっ、ゴホッ、くふうっ、じゅぶ、じゅぶ、じゅぶっ……」

太腿をキュッ、と閉じあわせて狼男の勃起を挟み込み、摩擦快感を増してやりながら、喉を犯す包帯巻きペニスを吸い上げ、弾力を増した肉茎に軽く歯を立てて刺激する。

（こんな辱め、終わらせる！一秒でも早く……！）

焦燥感に囚われながら、両手に握らされたゾンビの腐肉棒を扱き上げる速度を速め、膿汁を滴らせる亀頭を集中的に愛撫して、生ける死者に奉仕した。

「ソウ、ダ、イイゾ、淫乱雌豚メ！モットモット、オレタチニ奉仕スルノダ」

モンスター達も負けじとハードな愛撫を強め、感度を増している咲妃の身体に容赦のない快感を送り込んでくる。

母乳を滴らせる乳首が摘んで捻り上げられ、揺れ弾む爆乳に指が深々と食い込んで、白い乳肌揉み瘡ができるほどの荒つぽさでこね回す。

「くぁ！ んおおおつ、はぁあう、んんんん〜ッ！」

「コノ雌豚メ！ オマンコヲ、コンナニグジョグジョニシヤガツテ。イキソウナンダロ？ 意地ヲ張ラズニ、オレノチンポデ、イツチマエ！」

既に崩壊状態の秘裂を擦る剛毛ペニスは、巨大な亀頭で勃起クリトリスを集中的に弾き上げ、こね回して、鋭く痺れる女悦を送り込んでくる。

グチュグチュグチュギチュウツ！ ズリユズリユズリユルチュルンツ！

聞くに堪えない淫音を教室内に響かせ、甘酸っぱい愛液の飛沫を飛び散らせながら、とどめとばかりに秘部が撚り抜かれた。

（くう……身体が、ダメだ、イクっ！ 信司と有佳が見ているのに、絶頂……させられてしまうっ！ この私が……こんな奴らに……ッ！）

左右の乳首と喉粘膜を責められ、薄い革帯一枚に守られただけの勃起クリトリスを激しく擦り廻られた退魔少女の身体を、抑えきれぬ絶頂の大波が襲う。

「やはぁあぁ！ いっ、嫌あぁつ、ひぐうっ、んんんつ、イクっ……イク……ううッ！ やぁあう……くはぁあぁうううん〜っ！」



「すごいオッパイ。とつきーって、隠れ巨乳だったんだね。うわあ、プルンプルンで、いい触り心地♪」

股間で存在を際立たせた勃起と、量感溢れる爆乳が、集中的に弄られる。

「ふああ！ アツ、そつ、そんなに強く握るなッ！ んきゅううううッ！」

感度抜群のフタナリペニスは、薄いナイロン布越しに肉茎を掴んで弄り回される刺激に反応してビクビクとしやくり上げながら、充血をさらに強めてゆく。

「硬い……熱さが伝わってくるよ。きやはっ、ビクビクしてるう♪」

硬質ゴムのように生硬く充血した肉茎が、根本から先端まで何度も撫で擦られ、濃紺の布地を突き破らんばかりに張り詰めさせた亀頭の先端が、執拗に嬲られる。

布地に浮き出た鈴口のワレメを、指の腹で擦られ、爪の先で甘搔きして責められているうちに、水飴のように濃厚な先走りが布地を染み透ってジワリ、と滲み出してくる。

「ひあ！ うあ……はああんっ！ くっ……あ、はうっ！ く……う……んうううんっ！」

水着越しの亀頭責めに美貌を歪め、切れ切れに呻く咲妃の艶姿は、操られた少女達を激しく昂らせた。

「もう、ガマン汁出てきたよ。チンポの先っぽ弄られるの、気持ちいいんだ？」

「とつきーの身体って、ホントにエロエロだよねえ……知らなかったなあ」

卑猥な笑みを浮かべ、興奮で顔を紅潮させた水着少女達は、クラスメイトの勃起を好き放題に弄り回す。ペニス弄りにあぶれた女子達は、仰向けになってもほとんど形の崩れないお椀型の爆乳に群がっていた。

「とつきーの乳首、すぐく勃起してるよ……ちよつと味見してみようかな？」

揉みくちやにされているたわわな肉果の先端で、濃紺の水着生地をツンと尖らせた乳頭に唇が吸いつく。反対側の乳首にも、別の女子生徒が吸いつき、チュウチュウとはしたない吸い音を立て始めた。

「ふあ！ あッ！ くふうううんっ！」

吸いついた唇がすぼめられ、生温かくざらついた舌先が、布越しに先端を甘噛み混じりに舐め回すと、刺激に反応した乳首は、ジンジンと疼きながら勃起を強めてしまう。

「ちゅぱ……はああ、プリプリしてるう」

少女達の唇が離れると、勃起した乳頭が、唾液の濡れ染みのできた水着を突き破らんばかりに尖り勃っていた。

「これで、もつとエロエロになったね。いっぱいモミモミしてあげる」

勃起乳首の輪郭をあからさまに浮き出させたポリウレーム満点の柔肉が、休む間もなくこ

ね回され、股布に先汁の濡れ染みを形成した少女の勃起が、ぎこちないながらも執拗な手コキ責めにさらされる。

「ひうううんっ！ アッ、くあ、そんなに激しくッ！ ふはああああウンッ！」

クラスメイト達の愛撫を受けた神伽の巫女は、快感に翻弄されながらも、頑なに絶頂に抗い続けていた。

（ままだッ！ まだ、神気が練り上げられていない……もつと、もつと耐えて、精液に神気を練り込まねば……）

神の餓えと渴きを癒す流派、ウズメ流を極めた退魔少女は、理性をも焼き尽くしてしまいうような快感の劫火に炙られながら、体内で神気を練り上げてゆく。

「あー、下手すぎて見てもらえない。手本を見せてあげるから、交代しなさい」

教え子達を押し退けて割り込んできたのは、淫神に操られた女体育教師であった。

小麦色に日焼けしたスポーティー美女の手指が、水着越しの勃起を握り締める。

「くあ！ はあああうんっ！」

クラスメイト達の拙い愛撫とは桁違いに深く鋭い快感に勃起の芯を貫かれ、神伽の巫女は切羽詰まった声を上げて競泳水着姿の肢体を硬直させた。

「すごく硬い……サイズも、亀頭の生育具合も申し分なし。こんなに立派で虐めがいのあ

るチンポは久しぶりだわ」

根本から先端までじつくりと指を這わせ、今にもはち切れてしまいそうに充血した海綿体の硬度と感度を確認した女教師の指は、下腹にめり込んだ肉柱に沿って、緩急交えた摩擦運動を開始する。

「せつ、先生ッ!? ふああ! くふううんっ! んっんっんっんっ…あああんっ」

前後に滑る指の動きに連動して、咲妃の喉奥から、甘く裏返った快感の音が搾り出される。巧みな摩擦快感にビクビクと反応した美少女のペニスは、大量の先走りを溢れさせ、競泳水着の股間にできた濡れ染みを急激に拡大させた。

「ほおら、カウパーが溢れてきた。この立派な亀頭も、たつぷりと虐めてあげるわ」

親指の腹が敏感な裏筋から鈴口に至る縦筋を絶妙の力加減で擦り上げ、反対側の手指が亀頭全体をくすぐるように舞い踊る。

「ヒイイイッ! あ、あああッ! そこお、そこはッ、くひゅううううッ!」

敏感な亀頭をゾクゾクするような搔痒快感に包み込まれたフタナリ美少女は、しなやかな肢体を弓なりに仰け反らせてよがり悶えてしまう。

「すっごおい! 先生、どこでそんな超エロエロなテク覚えてたんですか?」

年季の入った亀頭責めのテクニックを見せつけられた女子達が、興奮に頬を染め、興味

津々の様子で質問する。

「フフフツ、学生時代、水泳部の合宿で、男子達相手にね……。部員内で本番禁止の取り決めがあったから、手と口だけで抜きまくってやったのよ。何人も同時に相手したこともあったなあ」

赤裸々な告白をしながら、淫神に操られた女教師は、教え子の股間で震えるフタナリペニスを熟練のテクニックで責め立てる。

「あなた達も覚えておいて損はないわよ。こうやって、根本を締めつけながら亀頭を擦ると、イキそうになってもなかなか出せないから、エッチの主導権を握れるのよ」

女教師は解説を交えながら、勃起の根本を強く圧迫して暴発を阻止しつつ、亀頭を包み込む手首にスナップを利かせ、敏感な先端部を磨り潰さんばかりの勢いで刺激する。

「はあああああああうっ！ あっあっあっ、くはあああああッ！」

ハードな亀頭責めの快感に射精中枢を直撃されながらも、放出を封じられた咲妃は、出すに出せぬ生殺しの絶頂感に悶え狂う。

「すごく脈動してる。指の輪っかが振りきられてしまいそうだわ。でも、まだまだ出させてあげない。もっともっと痺れさせてあげる！」

興奮した声を上げた女教師は、射精封じされたペニスをさらに激しく責め立てた。

「このままじゃ、水着に擦れて痛いでしょう？ ローション代わりよ」

先走り濡れてはいるが、まだまだ潤滑不足な競泳水着の股間に、女教師の熱い唾液がトロトロと垂らされる。

「ふぁ、はぁあん……」

淫熱を帯びた湿り気に、敏感な亀頭を包み込まれたフタナリ美少女は、悩ましげな声を上げ、競泳水着に包まれたダイナミックな肢体をわななかせた。

「これでいいわ……亀頭責めのテク、たっぷり味わってもらおうよ」

ペニス責めに慣れている女教師は、時折、唾液を追加しながら、射精封じた勃起の先端部だけを徹底的に責め立てた。濡れた水着生地を使い、亀頭の表面を磨き上げるようにこね回し、鉤形に曲げた指先で、鈴口の敏感なワレメを掘り返すように刺激する。

「ひぁ、あぐうううっ！ あひいッ、くぁ、あ、アッ、んぁぁ……きゃふううっ！」

屈服し、射精をおねだりしてしまおうか、という気持ちを抑え込み、神伽の巫女は、イクにいけない焦らし責めに耐え続けた。

やがて、射精欲求に張り詰めたペニスの脈動は指の力では押さえきれぬほどに力強さを増し、揉み廻らされている亀頭のワレメから溢れる先汁にも、白濁した精液が混じり始める。「先生、そろそろ出させてあげようよ。とっきーの射精するところ、見てみたい」

亀頭責めに夢中になつてゐる女教師に、女子生徒が淫らな期待に震える声をかける。

「そうね……私の中の声も、精液が欲しいって言つてるわ。常磐城さん、いいわよ、射精しなさい。出して、セーエキ……出しなさいッ！」

肉茎の根本を縛めていた指が離れ、亀頭を圧迫責めしていた指先が水着の布越しに鈴口をグリグリと抉つて、とどめの快感を送り込む。

「ひあああああッ！ 出るッ、出る……くふうううううッ!!」

全身の筋肉が股間の逸物に向かつて絞り込まれ、恥骨の裏側に蓄積されていた狂おしい圧力が一気に解放された。気が遠くなりそうな歓喜を伴った脈動によつて搾り出された灼熱の奔流が、勃起の芯を貫き、とてつもない解放感と共に噴出する。

びゅくんっ、びくびくびくんっ！ びゅくびゅくびゅくどくんっ！ どびゅううっ、びゅうっどびゅるるるっ！

今にも破れてしまひそうに張り詰めたナイロン生地を貫いて、濃厚な真珠色をした射精液が噴水のような勢いで迸つた。

水着生地で初速が弱められているはずなのに、噴き出したスペルマは、射精痙攣に揺れ弾む爆乳にまで飛び散り、濃紺の競泳水着を張り詰めさせた乳球の曲面を白く塗り込めてゆく。



「んあ、あああ、出るッ！ まだ……出るッ、あつあつはあああうううンッ！」

「すごい、こんなにいっぱい出るなんて、ああ、ステキ……もつともつと射精しなさい！」
女教師は、力強い脈動と共に射精を続けるペニスをきつく握って、絶頂痙攣する肉胴の芯を流れてゆくスペルマのプリプリした感触を堪能している。

「とっきーのセーエキ、ヌルヌルで、すつごくいやらしい匂いがする……」

「自分が出したチンポ汁、身体中に塗り込んであげるね」

クラスメイトの射精シーンを、固唾を吞んで見つめていた少女達は、競泳水着をドロリと汚した純白の絶頂粘液を指先ですくい取り、競泳水着に包まれた極上ボディに塗り込んでくる。

ぬちゅ、ぐちゅ、にちゅ……くちゅるっ……じゅるっ、くちやつ、ぐちゅるっ。

粘液の鳴る音を立てながら、メリハリの利いた肢体を白濁まみれの指が這い回った。

「ふあっ！ 胸っ！ うあ、あああんっ！」

たわわなバストが、数人がかりで揉みくちやにされ、水着生地をぬめ光らせるほど大量のスペルマを擦り込まれる。

色白できめ細かな素肌が剥き出しになった腋の下や腕、開脚を強いられた美脚の太腿にもスペルマが塗りつけられ、油を塗ったようにヌラヌラと照り光らせた。

「ほおら、最後はお顔にもお化粧してあげる」

日焼けした美貌に淫蕩な笑みを浮かべた女教師は、手のひらいっぱい盛りに上げたゼリー状のスペルマを、半ば放心状態で喘ぐ咲妃の顔に垂らし、化粧でもするかのよう塗り広げた。

「んぶ……う……はああ……んむ……ンツ！ くちゅ、ちゅば……んふ、んくつ」

生暖かいぬめりを顔に塗りつけられる感触に喘ぐ少女の口に、精液の残滓をまとわりつかせた指がねじ込まれ、ゼリー状の悦汁が舌にまで塗り込まれる。

「自分が出した精液の味はどう？」

「ちゅぶ……はああ、なかなかの美味だな……あふ、んんんツ……ちゅるっ……」

附着していたスペルマを残らず舐め取った咲妃は、精液まみれの顔に淫らな笑みを浮かべ、女教師の手に舌先を這わせて、残りの精液も味わった。

「その淫乱さ、ステキよ。フフフツ、あんなにいっぱい出したのに、チンポはまだまだ硬くて元気いっぱいじゃない。まだまだ射精できそうね」

大量射精の余韻にヒクついてる勃起を水着越しに愛おしげに撫でながら、淫神に操られた女は楽しげな含み笑いを漏らす。

「さあ、今度はあなた達の番よ。たっぷりシコシコしてあげなさい」

「胡散臭い連中を集めて、九未知会主催のお食事会か？」

どう見てもまっとうな企業や団体の重鎮とは思えぬ剣呑な雰囲気を出している男どもを見回しつつ、縛鎖に縛められた少女はゼムリヤに問いかける。

「紹介するわ。アタシに協力してくださっている、裏社会の重鎮の方々よ。実験素材の調達から、術式用の土地の確保まで、合法、非合法両面で絶大なご支持をいただいているわ。このホテルも、オジサマ達のご協力で借り受けたモノなの」

「悪党揃いだな。これまで虐げてきた人々の呪詛が全身に染みついてるぞ」

嗜虐と色欲の入り交じった視線を仮面越しに投げかけてくる男どもを見据えながら、拘束された少女は吐き捨てるように告げる。

「なかなか的を射た評価だわ。そう、このオジサマ方は、真の悪人なのよ」

色っぽい含み笑いを漏らしたゼムリヤは、舞台に立っていたマイクスタンドから、ワイヤレスマイクを抜き出して手に取った。

「皆様、お待たせしました。ようやく今夜のメインディッシュが届きましたわ。まずはご挨拶代わりに、カースイーターの秘められた部分をご覧に入れましょう」

褐色美女の目配せを受けた人狼ヴォルフが、咲妃の豊満なバストを守る革帯ボンデーに鋭い爪の生えた指先を引っかけ、無造作にずり降ろした。

過剰なまでに張り詰めた色白な爆乳が、薄紅色の乳首と乳輪の残像を描きながら、プリユリユンツと弾み出る。

若々しくきめ細かな乳球の先端では、尖りの強い乳首と、ふつくらと丸く盛り上がった乳輪が、男どもの卑猥な視線に挑むかのようにツンと天を向いていた。

「ええ乳しとるやないけ、後で、たーつぷりと揉んだり吸ったりさせてもらうでえ！」

脂ぎった禿げ頭を照り光らせながら、ヤクザの組長風の男が下卑た関西弁で野次ると、取り巻きの連中が追従の笑い声を上げた。

「オッパイの次は、オマンコをご覧くださいませす♪」

革帯の退魔装束を脇にずらされ、秘部をあらわにされても、神伽の巫女の不敵な表情は揺るがなかった。

「おおお！ 色艶、形ともにパーフェクトだ！ こんなに美しい女性器は見たことがない……まさに芸術品だな」

ロマンスグレーの髪をオールバックにした初老の男が、舞台に詰め寄るようにして秘裂を覗き込みながら、感嘆の声を漏らす。

「オマンコに負けないぐらい尻穴も美しいじゃないか。一晚中匂いを嗅いで恥じらわせながら舐めしゃぶっていたくなる極上ケツマンコだ。本当に美味そうだ、ああ、無性に腹が

減ってきたぞ！」

肉塊のように太った男が、ブヒブヒと鼻を鳴らして言いながら、テーブルに置かれた料理を手づかみで貪り喰う。

「美しいでしょう？ この肉体は、淫神に奉仕し、その力の核を取り込むために練り上げられたもの。その中でも、口と肛門は、淫神を受け入れる聖なる門として使われているんですよ」

色っぽい声で解説しながら、褐色肌の淫女は、剥き出しになった咲妃のアヌスに、革手袋に包まれた細くたおやかな指先を這わせて弄ぶ。

「ひう……く……う……ンッ！」

鋭敏なすぼまりを、冷たくしつとりと湿った革手袋に撫でられる感触に、呪詛喰らい師カリスイーターの喉奥から抑えきれぬ呻きが漏れる。

「ここから入った淫神は、身体の中の、どこでも好きなところに宿ることができるとのことよ。だから、常に清浄を維持されていて、そして、極めて敏感……」

「くあ、はああう……ひあ、んんんううッ！」

淫女の指先が、喘ぐ唇と薄紅色のアヌスにあてがわれ、小皺を引き結んだ筋肉の蕾をやわやわとこね回すと、囚われの退魔巫女は、湧き起る快感に身を振らせて感じ悶えてし

まう。

「気持ちいいのね？ 可愛らしいお尻の穴が、アタシの指をキュウキュウ締めつけてるわよ。もう少し奥の方も弄ってあげましょうか」

第二関節の辺りまで肛門に挿入した指先をさらに深くめり込ませて左右に捻りを加えながら、褐色肌の美女は、厚めの唇を淫蕩に笑み歪ませる。

「下拵えはこのくらいでいいわね」

アヌスから指がゆっくりと引き抜かれた。

「神をも魅了する肉体の持ち主であるアナタが、はしたなく喘ぎながらウンチを漏らす姿を、皆さんに見ていただきましょうね」

「なっ、何だと!？」

聞き捨てならぬひと言を告げたゼムリヤがパチンツ、と指を鳴らすと、人狼が責め具の乗った台を押ししてきた。台の上には、透明なローションを満杯にした大型バケツと、数本の極太浣腸器が並んでいる。

「並の快樂責めじゃあ、アナタは堕ちないでしょう？ 徹底的に羞恥を与えて、プライドを粉微塵に打ち砕いてから、じつくりと調教して、ア、ゲ、ルト」

妖艶な美貌にサディステイックな笑みを浮かべた褐色美女は、マイクを手にすると、観

客席に呼びかける。

「凄腕の傭兵を軽々とあしらうカースイーターの強さは、先ほどご覧いただけましたでしょうか？ この、強く気丈な美少女に浣腸責めをして悶え泣かせる権利、おいくらで買っていただけますか？」

「百万ッ！ 百万円出そう！」「百五十ッ！」「こっちは二百出すぞ！」

淫辱行為のオークションが始まると、裏社会の男どもは口々に入札価格を叫び、あつという間に入札額が跳ね上がってゆく。

「はなはだ不愉快だが、私もずいぶんな高値が付くものだな」

卑猥なオークションで盛り上がっている悪党どもを冷めた目で眺めながら、囚われの退魔少女は気丈さを失っていない口調で吐き捨てる。

「おめでとうございます。アナタが権利ゲットですわ♪」

最高金額を付けた銀髪オールバックの男がステージ上に招かれ、鎖を引かれて前のめりの体位を取らされた咲妃の背後に立った。

「本当に美しいアヌスとオマンコだな。チンポを打ち込んでやれないのが残念だ」

ムッチリと肉の乗った尻の谷間に顔を寄せ、呪詛喰らい師の股間を、荒い鼻息がくすぐるほどの距離で観察しながら言った男は、ゼムリヤから受け取った極太浣腸器のノズルで、

清浄感のあるピンク色をした尻穴を弄ぶ。

「可愛いケツ穴がヒクヒク動いているぞ。恥ずかしいのかな？　ククククッ。もつと辱めてやるぞ！」

冷たく硬いガラスの筒先が敏感な蕾の小皺を一本一本なぞるように撫でくすぐってくる感触に、薄紅色の美肛門は、キュッ、キュッ、と卑猥な収縮を起こして、責め役の男を樂しませた。

「ンッ……く……ふぁう……」

囚われの呪詛喰らい師は、わずかに頬を染め、切れ切れの喘ぎを漏らしながらも、表情を崩さず辱めに耐えている。

「そおれ、ズッポリと行くぞ！」

ローションに濡れ光る小皺の中心に、冷たいノズルがねじ込まれ、陵辱粘液の注入が開された。

「くぁ！　んきゅううう……ンッ！」

人肌程度に温められた大量のローションが、直腸内にニユルニユルと注ぎ込まれてくる不快な感触に、革帯ボンデーシ姿の若々しい肢体が緊張する。

ピストンが深く押し込まれ、粘性の強いローションは直腸内を満杯にして、さらに奥へ、

奥へと送り込まれてきた。

「う……あ……くはあ……ぐ……んんんッ！」

過剰に注ぎ込まれた粘液が消化管を張り詰めさせながら結腸部にまで侵入してくる鈍痛に、呪詛喰らい師の勝ち気な美貌が歪む。

「クククッ、苦しいかね？　しかし、まだ半分しか入っていないぞ」

サデイスティックで好色な笑みを浮かべた男は、浣腸器のピストンを深々と押し込み、特製のローションを残らず尻穴内部に注入した。

「もう一本注入させてくれ！　金額は、さっきの五割増しでいい！」

「それなら、こっちは二倍出すぞ！」「ワシは三倍出すぞえ！」

凜々しい顔立ちを苦悶に歪める美少女の痴態に興奮した男どもは、仲間割れを起こしかねない殺伐とした気を漂わせて、浣腸オークションに熱狂する。

「予想以上の人気ね……これ以上激昂させるのは、色々とマズイわね」

結局、ゼムリヤの提案で、その場にいた男達全員が金を出しあい、咲妃の尻穴に特殊ローションを注入する権利を獲得することとなった。

それは、少女の腸内に数リットルの浣腸液が注ぎ込まれることを意味している。

裏社会で数々の悪事に手を染め、司法機関もなかなか手を出せぬ大物犯罪者どもが、極

太浣腸器を手に喜々として少女に迫る様は、ある意味滑稽ですらあった。

「私にはこういう趣味はないはずなのだが、妙に興奮する。癖になりそうだよ」
銀髪オールバックの紳士が、ぎこちない手つきでピストンを押し込んだ。

「ワシが注ぎ込んだ浣腸液が、どんなに臭い糞になって出てくるのか楽しみだ」
臭いフェチの肥満男が、ニヤニヤ笑いながら浣腸液を注入する。

「ウツ……フツ……きつと……失望すると思うぞ……く……んんんッ！」

「生意気な小娘め、オレの会社の傭兵達をコケにした罰を受けてもらうぞ！」

傭兵達の親玉らしいひげ面男は、白く肉感的なヒップを平手打ちしながら、力一杯ローションを注ぎ込んだ。

「くあ、あ、くふううう……んッ！」

赤い手形を刻印された尻に汗粒を吹き出させ、重く張り詰め始めた下腹の鈍痛に呻く呪詛喰らい師のアヌスに、悪党どもの歪んだ欲望がさらに注入される。

「ホントにいい身体したお嬢ちゃんだな。うちの会社がやってる裏ポルノサイトで有料配信したら、数億ぐらい一日で稼げるぜ」

病的に痩せた男が、慣れた手つきで浣腸液を小出しに注入して、咲妃の苦悶する様子を存分に楽しんだ。

十数人の男達は、恥辱を煽る言葉を囚われの退魔少女に投げかけながら、可憐なアヌスの奥に恥辱の粘液を送り込んでくる。

「……そおら、ワシでラストや！ ネエちゃん、よう辛抱したなあ」

関西弁のヤクザ幹部が、どんなに辱められても慎ましやかなたたずまいを崩さず引き絞られた薄紅色の蕾に浣腸器の先端をねじ込み、汗ばんだヒップを舐め回しながら、特殊ローションをジワジワと注ぎ込む。

「んくうう、あ、はああう……ひぐううつ！ はああ……んっ、あぐううんッ！」

勝ち気な美貌を脂汗に光らせて苦悶する咲妃の肛門に、鈴付きのアナルプラグがねじ込まれ、革製のバンドでしっかりと固定された。

大量の浣腸液を注ぎ込まれた呪詛喰らい師カリスイーターの下腹は、妊娠中期の妊婦のようにポッコリと膨れ上がり、革帯ボンデーカリスイーターされた肢体に禁忌のエロスを加味している。

「浣腸が効いてくるまで、お話ししましょうか？」

連続浣腸を受けても、泣き言一つ漏らさずに恥辱に耐えている咲妃に、ゼムリヤが妖しい声をかけて来る。

「カースイーターに、亜神や人間による陵辱、特に中出しは御法度。消耗した気を補充させるだけですものね。でも、精気や霊気をまったく含んでいないモノで責めれば、体力や

神気の回復もできないでしょう？」

黒革のロンググローブに包まれた指先で、咲妃の汗ばんだ尻肌や、妊婦のように張り出した下腹部を撫で回しながら、褐色肌の淫女は語りかけた。

「くぁ……あぁあう……うッ！ く……うんんんッ！」

ぐぎゆるるるっ……。額に汗を浮かべて呻く咲妃の下腹が、はしたない音を立てる。

「腸の蠕動ぜんどうが始まったようね？ その特殊ローションは、アナタの腸内で水分を吸収されると、ゼリー状に固まるのよ。当然、ウンチがたくて堪らなくなる成分も入っているし、固まる過程で、大量のガスを発生させるの。ステキでしょう？」

「ぐ……う……卑劣で、悪趣味だな……んくう、ウッ……はぐううんッ！」

ぎゅごろごろろろっ……。ぐぎゆるるるるうっ！ 張り詰めた下腹が、ひととき大きく恥音を奏で、メリハリに富んだ緊縛ボディに、ドッ！ と脂汗が噴き出す。

（あぁあ……この感触……久しく忘れていた……便意とは、これほどまでに抗いがたく、これほどまでに苦しいものだったのか？）

神伽の巫女となって以来、彼女を悩ませたことのない生理現象を久々に味わった退魔少女は、込み上げてくる排泄欲求と、腹腔の奥でうねる凝固ローションの異物感に、汗まみれの緊縛ボディを強張らせる。

「今のアナタは、カースイーターでも、神伽の巫女でもないわ。ウンチがしたくて堪らないだけの小娘なのよ」

呪縛の鎖に縛められた少女の下腹を、黒手袋に包まれた淫女の指がジワリ、と圧迫してくる。腹膜を張り詰めさせた膨張感と鈍痛が一気に高まり、耐えようとする意思に関係なく、高まりすぎた圧力が肛門目指して殺到してくる。

「ぐああうッ！」

ブピッ！ プスウウッ、ブピルルッ！

くぐもった声を上げた少女の尻から、誰にも聞かせたくないガス噴出音が響く。

妊婦のように膨れあがった下腹に、黒く細い指がめり込むたびに、恥辱のガスが揉み出され、アナルプラグを咥え込まされた尻穴が高く、低く恥音を奏でさせられた。

「ええ屁の音やなあ。ケータイの着メロにしたいでえ！」

ヤクザ男が言うと、裏社会の男達は下品で無慈悲な笑い声を上げる。

「はあああう……ぐむ……んんんんッ！」

放屁音を搾り出されるたびに、汗びっしょりになったボンテージ肢体がガクガクと痙攣し、冷たい汗に濡れた美貌も、押し寄せる排泄欲求に歪んで、凛々しさを失ってゆく。

「ひと言、『ウンチさせてください』って叫べば、アナルプラグをすぐに抜いてあげるわ。

「ひああうんっ！ あひいいんっ！ ヒッ、アッ、ひぎいつ！ きゅふううんっ！」

汗に濡れ光る色白な豊臀に、紅色の鞭痕が刻印されるたびに、アナルプラグを飾った鈴がチリチリと鳴り、呪詛^{カクスイ}喰^クらい師^シの苦鳴に色を添えた。

ブビュッ！ プピイイイッ！ ブビビビッ！

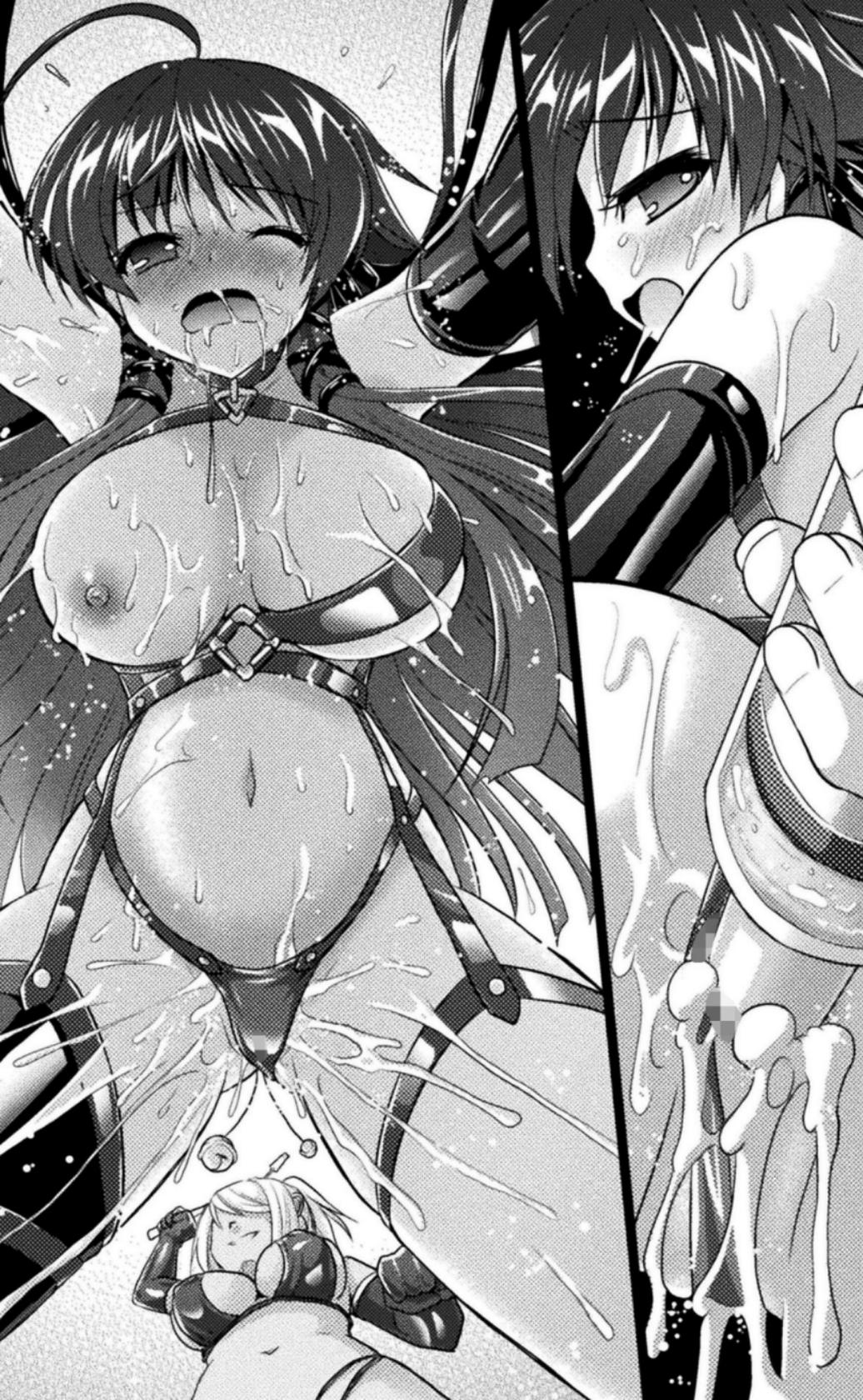
鞭打たれる衝撃で全身の筋肉が収縮するたびに、暴発を封じられた尻穴から甲高い放屁音が上がり、見守る男どもにも下卑た歓声を上げさせる。

（熱い……ッ！ 尻が……燃える……身中が、煮えたぎって……ああ……ッ！）

まるで、炙り焼きにされているかのような灼熱感に包まれた尻から発した妖しい波紋は、排泄欲求に強張り悶える全身を火照らせ、苦痛が快感へと変わるマゾ快感への分岐点へと、神伽の巫女の肉体を疾走させてゆく。

「いかがかしら？ 快感の耐性はあっても、こういう責めは効くでしょう？ 身体が敏感な分、余計に苦しいわよねッ？ あら、気持ちよさそうな声が出始めたんじゃないかな？ ほおら、もつと色っぽい声をお出しなさい！」

咲妃の上げる声に、艶めかしい響きが混じり始めたのを指摘しつつ、淫蕩なる女術者は鞭打ち責めに熱中してゆく。黒革のビスチェとロングブーツ、ロンググローブをまとった褐色ボディは、噴き出た汗にぬめ光り、鞭痕だらけの尻を凝視する瞳には熱い欲情の炎が



燃え盛っていた。

「いいわあ。アナタのお尻、打ちごたえ満点よ……でも、とどめはここよっ！」

下から薙ぎ上げられた乗馬鞭が狙ったのは、鮮やかなサーモンピンクに色付いた秘裂であつた。

パシイイイイインツ！ 鋭い音を立てて、最も敏感なワレメに鞭が打ち込まれる。

「ひぎいつ！ ヒツ！ イツ、くはああああああああ〜ンツ!!」

鞭打たれた性器から発した衝撃は、少女の意識を一気に被虐絶頂の領域へと飛翔させ、限界に達していた括約筋を完全に弛緩させてしまう。

プシイイイツ！ シャパアアアアアアア〜ツ!!

緩みきつた尿口から、熱い尿水が放物線を描いて排泄され、床に飛沫を散らす。

「オマンコ鞭打たれて、オシッコ漏らしながらイツちゃうなんて、すっかりマゾ快感に目覚めたみたいね？」

「ハアハアハアハア……余分な圧力が減つて、これで、少し楽になった」

内臓を搾り上げるような苦痛を伴って押し寄せる排泄欲求に顔を歪めながらも、咲妃は減らず口を叩くだけの気丈さを失っていない。

「さすがね……。アナタの忍耐力に敬意を表して、一つ、賭けをしない？」

「賭け、だど？」

「ええ。アナタの腸と同化している亜神に、少しだけエネルギーを与えてあげるわ。活性化した亜神が、ウンチを全て吸収、浄化すれば、アナタの勝ちよ」

妖しい笑みを浮かべたゼムリヤが、パチンツ、と指を鳴らすと、大型のグラスに入った白濁液が運ばれてきた。

「オジサマ方のボディガードの皆さんに、元気いっぱいの精液を提供していただいたわ」
「やはりそういう趣向か……くう……んぐうううッ！」

ぐぎゆるろつ、ぎゆるるるうつ……下腹が恥音を立てる。

「ほらほらあ、我慢しすぎてお腹と心が壊れちゃう前に、アタシからのスペシャルサービ
スドリンク、飲んでちょうだいよお♪」

艶めかしい声を出しながら、吊るされた咲妃の身体に擦り寄ってきた褐色淫女は、グラスに満たされた欲望の煮詰め汁を強引に飲ませようとする。

「んぐ……ぐ……んぷうう……ッ」

むせ返るような性臭に顔を顰める呪詛喰らい師の口にグラスの縁があてがわれ、煮こごりのような塊混じりの汚液がドロリと流し込まれてきた。

（後悔させてやる！ この精気、排便抑制だけに使うとは限らないぞ！）

「んぐ……ウツ。ゴホッ……ごくつ……ん、んくつ……くちゅ、んはあ……」

逆襲への一縷の望みを見出した咲妃は、汚辱感に耐えつつ口を開き、牡臭く苦いスペルマを受け止め、吐き気を堪えて呑み込む。

「そうよ、いい子ね。もっと舌を突き出して受け止めないと、大事なザーメンドリンクがこぼれちゃうわよ」

咲妃の色白な裸身を背後から抱き締めた褐色淫女は、猫なで声を出しながら、グラスの傾きや距離を調整し、恥辱の飲精行為を行なっている咲妃を焦らし、弄ぶ。

数十人分が吐き出した大量の白濁液が、粘ついた糸を引きながら、差し伸べられた舌にドロドロと垂れ落ち、気丈な退魔美少女の身も心も汚してゆく。

「く……あはあう……んむ……くちゅ、くちゅ……んくつ……あ、はあ……ゴホッ……うっ、くうう……じゅるっ、くちゅくちゅくちゅ……ゴクンッ……」

ゼムリヤの気まぐれなグラスの動きに渋々付き合いながら、囚われの退魔少女は、むせ返りそうな牡臭さを放つ濃厚精液を舐め取り、啜り込む。

「あんっ！ こぼしちゃダメじゃないの。ほおら、ちゃんと舐め取りなさい」
「んぷ……くちゅ、はあう、くふう……ぴちゅ、ちゅぷ……うあ……んむうう」

剥き出しにされた爆乳にまで滴り落ちたスペルマを、黒手袋に包まれた指ですくい上げ



ベルトで栓をされた尻穴が、込み上げてくる排泄物の圧力を抑えきれず、今にも噴火しそうにヒクついて、鈴音と放屁音を奏でていた。

「アナタの内臓に同化した神体にとつては、反ネクトルは毒薬と同じ。一刻も早く排泄しようとするでしょうね？」

ゼムリヤのいうとおりであった。精液に混ぜられた反ネクトルに拒絶反応を起こした亜神は、排泄欲求を解消するどころか、逆に激しい蠕動を起こして異物を一刻も早くひり出そうとしているのだ。

「ゼム……リヤ……ウツ！　ぐあ、ぐううううウツ！」

妊婦のようなボテ腹から恥音を響かせ、全身汗まみれになって苦悶する緊縛美少女の痴態を觀賞しながら、褐色淫女はサディスティックな笑みを浮かべている。

「わずかな希望を打ち砕かれたのが悔しい？　それじゃあ、ウンチを出して、もっと恥辱にまみれなさい！」

アナルプラグがズルリと引き抜かれ、腸奥から込み上げてくるモノを必死に押し留めようと引き絞られる肛門の様子を、カメラがアップで捉えてスクリーンに投射する。

苦悶する咲妃の尻の下には、間もなくひり出されようとしているモノを受け止めるように。透明な大型アクリルボールが用意された。

「あひつ、ダメエ……いつ、今、抜いたら、くううう、あ、あがああつ！」

ブホッ！ ブバツ！ ブピユウウウツ！ ブピイイイイイイイイッ！

出口めがけてジワジワと進軍してくるゼリー状の固体よりも先に、大量に発生していた気体が押し出され、誰にも聞かせたくない恥辱のガス噴出音が、静まりかえった宴会場内に連続して響いた。

「出るッ……ああああ、出る……んぐうう」

背筋ばかりか、後頭部の辺りまでが凍りつくような羞恥に震えながら、ボンデージコス姿で縛鎖に吊るされた美少女は、怒濤の排泄欲求に屈服する。

ブビイイイッ！ ブスツ、ブチュツ、ずぶぶぶつ！ ズルルルロロロオオオオ
ッ！

火山が噴火するかのよう^にグウツ、と盛り上がり、括約筋を緩めて開いてしまったアヌスから、ゼリー状に固化化した半透明の極太擬似大便が、卑猥な排泄音を伴って大量にひり出された。

「おおおっ！ 出た出たあ！ 見事なまでの一本グソだ」

「色が透明なのは気に入らんが、お嬢ちゃんの排便顔がエロいから、許してやろう」

ついに屈服した呪詛喰らい師の尻と、屈辱の排泄に歪む美貌を至近距離から観賞しながら

ら、裏社会の重鎮どもは大いに盛り上がっている。

「あはあああ、見る……なッ、やはああん、出……んきゅふううんッ！」

苦痛の塊と化していた固形化ローションが尻穴を押し広げてズルズルと排泄されてゆく、気が遠くなりそうな解放感に、恥辱で紅潮した美貌がだらしなく蕩ける。

ずびゆるるるるッ！　ぶほッ、ずろろろッ、じゅぷるるるッ……ぐきゆるるるッ……ぶぱッ！　どぶッ。

（あああ、気持ち……いいッ！　奥から込み上げて来て、内側から、こじ開けられて……出てるッ！　いっぱい……出て……あ、あああ、ダメだ……イクううッ！）

狂おしいほどに感度を増している腸壁と肛門は、ゼリー状の排泄物に擦られる刺激を、壮絶な快感に変換して、咲妃の肉体を排泄絶頂へと追い込んだ。

乳房と下半身をさらけ出したボンデージ緊縛ボディが甘い汗に濡れ光って仰け反り、アヌスの崩壊を止められずに排泄を続けながら女悦の痙攣に包まれる。

「くはあうんッ！　イツ……イクッ。あああッ！　イクイクイク……んんんんッ！」

脂汗にまみれた美貌を、だらしなく歪めた呪詛喰らい師は、固形化ローションをズルズルとひり出しながら、底なし沼のようなエクスタシーに意識を呑み込まれてゆく。

「ずいぶん深く絶頂しちやったわねえ。普段は、腸と融合した亜神が、排泄物を残らず浄

化吸収してくれるから、ウンチなんてするのは久しぶりでしよう？」

ガックリとうなだれて喘いでいる咲妃の耳元に囁きかけた褐色美女は、なおも排泄を続けている尻の谷間に指を滑らせ、目いっぱい広がってヒクついている肛門の縁を指先で掻きくすぐってイタズラする。

ほのかな腸液臭混じりの湯気を立ちのぼらせる恥辱の排泄物は、アクリル樹脂製の大型ボウルに受け止められ、男どもに披露された。

「何だ、糞の匂いは、ほとんどしないんだな」

臭いフェチらしい太った男は、アクリルボウルに顔を突っ込んでブヒブヒと鼻を鳴らしながら、残念そうに言う。

「神伽の巫女は、不浄を嫌う神体に伽するため、食香と呼ばれる特殊な香料を食事と共に摂取していて、体内を常に清浄にしているんですよ」

神伽の巫女について調べ上げているらしいゼムリヤが解説する。

「つまらんなあ。こういう気の強そうな美少女が、羞恥にすすり泣きながら、鼻が曲りそうに臭いのをぶちまけるのが堪らんのじゃないか！」

「いいご趣味ですこと。それじゃあ、リクエストに応えちゃいましょうか？」

褐色美女は、サディスティックに微笑む。

「咲妃ちゃん、アナタの出したローションウンチ、食べなさい……」

目の前に、まだ熱気を帯びたゼリー化ローションを満たしたアクリルボウルが置かれた。

「くうっ！ 嫌だッ！ 断固拒否するッ！」

呪詛喰らい師は、妖しい淫臭をムンムンと立ちのぼらせる容器から必死に顔を背けて拒絶する。

「上のお口から食べられないなら、下のお口から挿れちゃおうかしらね？」

サディズムの極致のような声で告げたゼムリヤが、パチンッ！ と指を鳴らすと、新たな責め具が運ばれてきた。

点滴台のような車輪付き支持具に吊された透明なバケツに、白濁した粘液がドップリと満たされており、バケツの底からは、ポンプ付きのチューブが伸びている。

「アナタが浄化しちやったフタナリ美少女達から搾り取った、混じりつけなしの、反ネクトル精液よ。コレを今から、お尻の穴に注入してア、ゲ、ル♪」

「なっ、……そんなモノを!! やっ、くあああッ！」

先ほど、恥辱の排便をさせられたばかりの肛門に、注入ノズル付きのアナルプラグがねじ込まれる。

「今回は、お一方三回までポンプ操作サービスさせていただきますわ。カースイーターの

お尻に、たゞつぷりと注入してやってくださいな♪」

浣腸行為の興奮冷めやらぬ男どもは、先を争って舞台上がってくる。

「覚悟しろよ、お嬢ちゃん。腹がパンクする寸前まで注ぎ込んでやるからな！」

サディスティックな本性を剥き出しにした裏社会の男達は、凶喜の表情でポンプを握り締めた。

シュコツ、シュコツ、シュコツ……。

無慈悲なポンプ音が上がるたびに、呪詛喰らい師の腸内に、生ぬるい陵辱ジェルが、ドプツ、ドプツ、と注入されてゆく。

「くあ！ はぐうううッ！ ンツ、あああんツ！」

「おー、入る入る！ チューブが透明やから、入っていくのが丸見えやな！」

ヤクザ男が、関西弁で言いながら、楽しげにポンプを操作する。透明なチューブに繋がったアナルプラグには、逆流防止弁が付いているので、注ぎ込まれた濃厚精液は、一滴も漏らさず呪詛喰らい師の腸内に溜め込まれる。

ぐぎゆるるっ……ぎぎゆるろろっ！

反ネクトルに反発した腸が妖しく蠕動し、異物を排泄しようとするが、それも叶わず、狂おしい便意だけがどんどん強まってゆく。

「あふううう……くううんッ！」

脂汗にぬめ光るボンデージ裸身をくねらせ、肉感的な尻と太腿を緊張させて便意に耐える呪詛喰らい師の腹部は、容赦のない注入で、刻一刻と膨らまされてゆく。

「フフフッ。いっぱい入るわねえ。これは、想像以上の大量排便シヨーになりそうで楽しみだわ」

ゼムリヤは、褐色の美貌に、淫辱の化身のような笑みを浮かべ、ザーメン浣腸責めに悶えるカースイーターを言葉責めで辱める。

十数分後、数リットルはあろうかと思われた白濁液は、全て咲妃の腸内に注ぎ込まれてしまう。

「くあ！ んぐむううううんッ！」

妊婦の様に腹を張り詰めさせ、苦悶の汗に全身をぬめ光らせて悶えるカースイーター。

精液に混ぜられたわずかな反ネクトルだけでも強い拒絶反応を示した腸管は、高濃度の邪精液を注がれて激しく蠕動し、理性を侵食するほどの便意を湧き起こらせていた。

腹腔内で大蛇が暴れている様な感触が絶え間なく襲ってきて、全身を悪寒が包み込み、粘ついた汗がドッ！ と噴き出てくる。

アナルプラグを啜え込まされた肛門括約筋がビリビリと震え、今にも決壊寸前の有様だ。

「腸に宿った神体が弱り切っているから、今度は、さつきみたいに綺麗な透明ゼリーウンチじゃすまないわよ。臭いザーメンウンチ、ブリブリってひり出しちゃいなさい」

邪悪な笑みを浮かべて顔を寄せてきたゼムリヤは、苦しげに歪んだ美貌を濡らす苦悶の汗を、ヌロツ、と舐め取り、膨らんだ腹を撫で回して、カースイーターの恥辱を煽る。

「もう堪らんツ！ この娘の口でいいから、犯させろ！」

興奮した男が、勃起をさらけ出しながら叫ぶ。

「そうやで！ ワシもチンポが暴発寸前や！ マンコがアカンのやつたら、お口でもええで！」

「そうねえ。いいウンチを出してもらうために、少しは栄養摂らせてあげましょうか？ 咲妃ちゃん、オジサマ達のチンポ汁、飲ませてア、ゲ、ル♪」

嗜虐の微笑みを浮かべて言ったゼムリヤは、責め具を満載したワゴンから、何やら妖しげな器具を持ち出してきた。

「おチンポが啜えやすいように、これ、つけてあげるわ」

「何を!? あぐむううんツ！」

狂おしい便意に悶える呪詛喰らい師カースイーターの口に、開口具が装着される。

「さあ、これで、嘔み切られる心配もございませんわ。オジサマ達のたくましいチンポで、

カースイーターの口マンコ、存分にお楽しみくださいませ♪」

目の前にズラリと並んだ勃起の群れに、口枷を付けられた神伽の巫女は嫌悪の表情を浮かべて呻いてしまう。

何か妖しげな薬でも服用しているのか、もう、老人と呼んではいい年齢の男どものペニスは、若者顔負けに怒張して欲望の解放を待ち望んでいる。

「オレ等の目の前でクソ漏らしてアクメしたんだ。チンポしゃぶりぐらいどうってことねえだろ？」

赤黒い勃起が、咲妃の口内に遠慮なく突き挿れられイラマチオ陵辱の宴が開催された。

「くふううう！ んぶむうううッ！ ゴホッ、ゴホッ！」

苦しげに咳き込む美少女の喉粘膜を、凶暴に張り出したカリ首でゴリゴリと掻き擦りながら、ストロークされる。

「ムフウ！ こいつは想像以上に気持ちいい喉マンコだ！ オッ、おおお！ その苦しげな舌使い、いいぞお！」

熱く猛った怒張を締めつけ、苦しげに震える喉粘膜の蠢きに昂った男は、苦しげに顔を歪める咲妃の髪を鷲掴みにして固定し、荒々しく腰を使った。

「あぐううう……んふ……ゴホッ！ ぐ……んぐううう」

「んくう……ふぁ、あんッ。私ばかり恥ずかしいのは不公平だぞ。お前達のペニスも、見せろ……」

艶めかしい響き混じりに命令された少年達は、戸惑った表情で顔を見合わせ、モジモジと身じろぎしつつ、ズボンと下着を一気にズリ下げて、発育途上の男性器を剥き出しにした。

(……意外と可愛い形なんだな……)

この年代の男子達の勃起を初めて目にした呪詛喰らい師は、口元に小さな笑みを浮かべる。

いずれも仮性包茎気味で、亀頭の発達もまだ不十分な幼根だが、下腹にめり込まんばかりに充血して伸び上がり、今にも弾けてしまいそうにいきり勃っていた。

あまり綺麗に洗っていないのか、雨に濡れた革製品のような恥垢臭が、生育途上のペニスから漂ってくる。

「オナニーしてくれたら、私の乳首を見せてやるぞ」

込み上げる悦波と羞恥心を抑え込んだ神伽の巫女は、共犯者を誘うような心境で、淫らな誘惑を仕掛ける。

「えっ!? う……うん……」

初めて生で見る、女の人のオツパイに視線を釘付けにされながら、少年達は勃起を握り込み、まだ覚えてたの自慰行為を開始した。

「ンッ、く……ンッンッンッ……」

押し殺した呻きを上げながらの遠慮がちな上下動のたびに、初々しいピンク色の亀頭が包皮を剥け返らせて顔を覗かせ、先端のワレメに、男の子の愛液がキラリと光る。

（あの子達、私の身体を見ただけで、こんなに興奮しているのか……妙な気分だ）

誘惑者の悦びが、背筋をゾクリ！ と駆け抜け、羞恥の感情が興奮へと変質してゆく。

「その調子だぞ。約束通り、私も見せてやる……」

少年達の視線を釘付けにしている爆乳の奥で、胸の鼓動が速まるのを感じながら、革帯ボンデー姿の美少女は乳首をかううじて隠していた深紅の革帯をゆつくりとずらしてゆく。男子達は、白い乳球の丸みを滑ってゆく革帯の淫靡な動きを瞬きもせずに見つめながら、未熟な勃起をヒクヒクとしゃくり上げている。

ずれた革帯が乳房の曲面を一気に滑り降りると、既に勃起状態の乳首がピンク色の残像を描いて、プリュンッ！ と跳ね出てきた。

「すげえエロ乳首だあ！ 自分でしゃぶってみせてくれよ、そのデカパイならできるんだろ？」

まだらに染めた金髪を、ヤマアラシのように尖り立たせた若者が、卑猥なりクエストを叫ぶ。

「く……ガマンせずに、いつでも出していいんだぞ。お姉さんに、キミ達の射精、見せてくれ」

下品な要求を無視して、咲妃はあらわになった乳首の周囲を指先でなぞり、双房の肉果を、むにつ！と揉み寄せて、少年達に自慢の乳首を見せつける。

「ハアハアハアハア……オッパイ……乳首……」

ネットで目にするエロ画像とは桁違いの迫力と生々しきで迫ってくる美少女の爆乳を凝視しつつ、三人の男子は夢中になって肉茎を弄り、稚拙な手淫行為を加速してゆく。

（これは、いつもの神伽の戯とは勝手が違う。ウズメ流の技巧で少し愛撫してやれば、この子達は数秒で絶頂させられるのに……）

目の前でぎこちなく扱き立てられる成熟途上のペニスを見ながら、咲妃は菌がゆさを感じている。

「もっと激しく擦るんだ。私も……ひうッ！」

少年達に誘惑の声をかけながら、乳輪ともどもプツクリと盛り上がった乳首のシルエツトをなぞるように円を描いて指先を滑らせると、メリハリの利いたボンテージボディが、

爆乳の奥にまで浸透してくるむず痒い悦波にわなないた。

「んくうう、あ、はああ……ひあ……んんんッ！」

抑えきれぬ甘い喘ぎが喉奥から漏れ、勝ち気な美貌が色っぽく歪む。

「いいぞいいぞお。超色っぽいぞお！」

「感じて顔もエロエロだ……」

咲妃が乱れるほどに、男どもの視線も熱を帯び、それが少女の肉体と精神を燃え上げながら
せる。

（そうか……これが、神をも歪ませる人の淫情……その一端を今、私は身をもって体感し
ているんだな）

淫神を封じるためだけに肉体を練り上げてきた退魔少女は、ストリップ劇場の小さな舞
台上で、淫神を産み出す根源となる力の歪みを感じつつ、自慰行為を続ける。

「くふう……ンッ、あ、ひあ、あんッ！」

硬く尖り勃って疼く乳首を摘んでクリクリと揉み転がすと、無意識のうちに美尻がくね
り、太腿が切なげに擦り合わされて、甘く蠱惑的な淫臭が極上ボディから香り立つ。

「おっ、お姉さん。すぐくエッチで……綺麗だよ。ハアハアハア……」

まだ幼さの残る顔を紅潮させた三人組は、片手ですっぽりと握り込めるサイズの肉突起

を稚拙な技巧で擦り立てて、興奮の頂点へと駆け上つてゆく。

包皮と亀頭の間で、男の子の愛液がこね回されるクチュクチュという淫音が高まり、華奢な膝がガクガクと切羽詰まった震えを始めた。

「イッて……ほら、乳首、舐めてみせてあげるから、んっ……びちゅ、れるっ……」

揉みこねによって張り詰めた爆乳を持ち上げた呪詛喰らい師は、痛いほどに尖り勃った乳先に舌を伸ばし、チロチロと舐めくすぐる。

「はふうんッ！ あふ、あむ、ちゅば、くちゅ、れるっ……ちゅばちゅばちゅば、びちゅびちゅびちゅ……」

ゾクゾクするような搔痒快感に鼻を鳴らしつつ、勃起乳首を左右交互に舐め、吸い上げた神伽の巫女は、色っぽい流し目で少年達の絶頂をねだる。

「うお！ マジで舐めてるぜ、おい！ すげえ、エロいなあ、おい……」

先ほど、乳首舐めをリクエストした若者が興奮した声を上げるのを聞きながら、ボンデ―ジ美少女は自分の乳首に控えめな舌技を駆使する。

「お姉さん……すごい……んんんッ！」

年上美少女の乳辱オナニーを凝視し、小振りな勃起を猛然と扱き上げた三人組は、ほぼ同時に絶頂を迎えた。

「ふあ、あつあつアツ！ 出るッ、でるよおお！」

甲高く裏返った叫びと同時に、クルミサイズの陰囊がキュウツ、と収縮する。

びゆくつ、びゆくびゆくんっ！ びゆるううううつ、びゅぶるるるるっ、びゆくるんっ！

まだ成熟途上の肉突起が下腹を叩いてしゃくり上げ、濃度が不均一なスペルマを断続的に射出する。

「んふう！ んんんんッ！」

わずかに顔を背け、身を仰け反らせた咲妃に向かって撃ち出された絶頂エキスは、たわわなバストの曲面にこつてりと粘り着き、刈りたての若草のような初々しい精臭を立ちのぼらせた。

甘美な放出は、それだけで終わりではなかった。

「あ、あ、あああッ！ やあああんっ！ まだ、出るう、何か、出ちゃうウツ！」

まるで女の子のように甲高い声を上げた少年達のペニスが一ときわ激しく跳ね回り、銀色の奔流を噴き上げた。

ビキュルルルッ！ ズビユルルルウウウウッ！

未成熟な精巢内に憑依し、興奮を煽っていた妖銀貨が、射精の脈動とともに尿道を熱く

走り抜けて射出されているのだ。

「やっど……出てきたか？　くう、はふうう」

ビチャンツ！　パチュンツ！　パシンツ！

精液よりもずっと重々しい粘着音を立てながら、少女の爆乳に水銀状の淫神がぶちまけられる。

少年達の体温で温められた液体金属は、爆乳の曲面に沿って薄膜状に広がり、芸術的な半球状の肉果を完全に覆い尽くす。

「まずは……三人。……う？　ひあうううツ!!　身体の中に……はっ、入ってくるツ！　くああうんんんッ！」

液体金属の射出を終えて昏倒した少年達の様子を確認していた咲妃は、銀メッキされた爆乳を押さえて身悶える。神伽の巫女を新たな依り代と認識した淫神が、体内への侵入を開始したのだ。

ピリピリとむず痒く痺れるような快感を与えつつ、汗腺や乳腺から侵入した妖銀貨は、血流に乗って全身に回り、肉体を過剰に活性化させてゆく。

乳首の勃起がさらに際立ち、全身が汗ばんで、スポットライトの光を受けてヌメヌメとオイルを塗り込んだように照り輝く。

「あはああ、暑い……身体が……きゅふううんんッ！」

舞台の上で、深紅の革帯ボンデージ緊縛された極上ボディが艶めかしく乱れ、くねり悶えた。

肉感的なヒップが上下左右に振られ、尻に負けず劣らず肉感的な乳房が喘ぎにあわせて重々しく揺れ弾む。色白な肌がほのかな桜色に染まり、甘く香しい汗粒を噴き出して、視覚のみならず嗅覚でも男達の淫欲を昂らせた。

「ガキにチンポ汁ぶっかけられただけで派手にイッてやがる。淫乱マゾ美少女なんだな。たまんねえ！」

客の一人が嘲笑混じりの声を上げる。どうやら、水銀状の淫神は男達には見えていないようだ。

「絶頂、一回目……」

ミスカが、わずかにかすれた声をかけてくる。

眼前で繰り広げられるオナニーショーに、男装の麗人も興奮しているのか、色白な頬は赤みを帯び、エメラルド色の瞳は熱く濡れているように見えた。

（まだ、三人分しか受け入れていないのに、こんなに欲情してしまうのか？ 長引けば、不利……）

ただでさえ感度の増している肉体が、恐ろしいほどに欲情してゆくことに危機感を抱く
咲妃。

「ガキどもと違って、オレ達はオッパイだけじゃ満足しねえぞ！　そろそろオマンコ見せ
ろよ！」

「はあはあはあ……くう……う、んんんッ！」

焦燥感とともに、ゾクゾクするような興奮を覚えてしまいつつ、男達に背を向けてうず
くまった呪詛喰らい師は、尻の谷間に食い込んだ革帯に震える指を引っかけ、ゆつくりと
ずらしてゆく。

騒いでいた男達が、シン、と静まりかえり、秘部を覆う薄皮が剥き上げられてゆくのを
見守った。

（ああ、神伽とはいえ……こんな恥辱……くう、全員が、見ている……）

股間に集中する視線を痛いほどに感じつつ、愛液と汗にぬめった革帯をヌルリ、ヌルリ
と滑らせる。

ぬぶ……くちゅッ……小さな粘音を立てた革帯が股の付け根に引っかかり、恥ずかしげ
に引きすぼめられた肛門と、濡れ開いた秘裂が剥き出しになると、男どもにどよめきが起
きた。

「今まで見たことがないぐらい綺麗なピンク色だ……ヒクヒクしてる」

「美味そうだな。現役女子高生の超美マンコとアナル、一晚中でもしゃぶり回してやりた
いぜ！」

「ああ、そつ、そんなに……見るなあ……」

狂おしいほどに感度を増した粘膜組織に、男達の下品なヤジがビリビリと響いて、無意識のうちに尻がくねってしまふ。

「オマンコ、もう濡れ濡れじゃないか。弄り回して、もつとグチョグチョにしてみせてくれよ」

男の声が見えない舌となつて腔粘膜を舐め上げ、欲望に猛つた視線が不可視の指のように腔口とアヌスを弄り回す。

「んあ……あ……きゅふううん……ッ」

レーザー光線のように集中してくる視線を避けるかのように伸ばされた右手が秘裂を覆うと、指先に、火傷しそうに熱く、ヌルリと湿った腔前庭の感触が触れてきた。

「はふ……う、ひゃああんッ!!」

火照り疼く濡れ肉のワレメに、そつとあてがった指を少し動かしただけで、落雷を受けたような衝撃に美尻が跳ね上がってしまう。

「おや？ 二度目の絶頂かな？」

妖銀貨の声に反論もできず、咲妃はボンデー裸身を小刻みに痙攣させている。

(ダメだ！ ここを弄つたら、感じすぎて理性が飛ぶ)

敏感すぎる秘裂から慌てて手を離れた神伽の巫女は、アヌスの蕾へと恐る恐る指を伸ばした。

「こっ、こつちなら……ひう！ んっ、う……んああ、くううう、ふうううむんっ！ は、

あ……あああん……ッ」

細やかな小皺を引き結んだすぼまりをそつと撫で、指の腹で押し揉むと、背筋を鋭い快感電流が走り抜け、恥ずかしい声が漏れてしまうが、幸いにして理性が飛ぶほど強烈ではない。

「おいおい、いきなりアナルオナニーか？ こいつは筋金入りの変態マゾ娘だな」

五十代後半のでっぷりと太った男が、嘲りの声を上げると、他の客達も次々にはやし立てた。

「マジでクソの出る穴とは思えない綺麗さだな。思いつきり吸ってみたいぜ」

「こつち向いて、肛門ヒクヒクさせてくれよお！」

投げかけられる声に羞恥と興奮を煽られつつ、咲妃は慎重な指使いでアヌスの感度を確

認する。

（神伽で鍛えられた尻穴は、快感に何とか耐えられるか？ ならば……恥じらいを捨てて、一気に男どもを昂らせ、果てさせてやる！）

「ふぁ、そつ、そうだ……変態女の尻に、お前達の精液、たつぷりとかけてくれ」

悩ましげな喘ぎ混じりに呼びかけた咲妃は太腿に巻かれたペンホルダーから、呪印刻印用の赤ペンを抜き出し、細いペン軸をアヌスにあてがうと、ゆつくりと挿入してゆく。

くぶ……きゅむつ、ぬぶ……ぬぶぶぶぶ……ッ。

桃色菊の蕾のようなすぼまりを押し広げて、深紅のペン軸が潜り込むのを、男達は息を呑んで見つめていた。

「ひょおお！ ペンまで使うのか!? 淫乱だなあ」

「そのペン、後で買うよ！ 売ってくれ！」

下品なヤジを聞きながら、肛門に挿入したペン軸を摘み、緩やかなピストン運動を開始した。

硬質な異物の感触が括約筋を擦り、直腸壁を舐めるように動かたびに、むず痒い悦波が尻穴から湧き起こる。

「ひう！ んっ、んっ、んっ……あ、あんッ、くふう……はう！ くううん……ッ」

射精中枢をピンピンと刺激するような悩ましげな喘ぎを漏らしつつ、神伽の巫女はアナ
ルオナニーに没頭した。

（技巧の宿った指よりも、ペンの方が快感が穏やかだ。それに、男達も興奮している。一
石二鳥……だな）

まだ、いくらかの計算高さが自分の心に残っていることに安堵しつつ、恥悦を堪えてペ
ンを挿挿する。

「はああ、あんツ！ はっ、はやくっ！ 私のいやらしい尻に……熱い精液、かけて……
ぶちまけてくれ……」

神伽の門として練り上げられた秘め穴を、深紅のペン軸で犯しながら、咲妃は後背位の
体勢で突き出した美尻を打ち振って、卑猥なおねだりで男達の自慰を煽る。

「一本じゃ足りないだろ？ もう一本挿れるよ！ いや、まとめて全部イッチまえ！」
スーツ姿の中年男が、赤黒いイチモツを抜き上げながら声を荒らげた。

「いつ、いいぞ。だから、全部挿れたら、私がイクと同時に、あひっ、ンッ、みんなで射
精してくれ……はう、きゅふううん！」

ジワジワと高まってくる拡張快感に耐えながら、一本、もう一本と、ホルダーから抜き
出した赤ペンを尻穴に挿入し、ついに装備していた五本を全て呑み込んだ。

大きく広がった肛門括約筋が深紅のペン軸を締めつけ、ギチツ、ギユリツ、と軋み音を立てる。

「あひッ、ンッ、あ、あはああ、きつい……ッ！」

五本の赤ペンを肛門に咥え込んだ尻を高々と掲げて震わせ、舞台の床板に爪を立てて、呪詛喰らい師は押し寄せてくる絶頂の波に抗う。

薄壁一枚隔てた腔にも、拡張快感は伝わり、手を触れてもいないヴァギナが物欲しげに収縮して、白濁した濃厚な愛液を滴らせる。

「キヒヒヒッ、ピンクのおマンコからマン汁ダラダラ垂れ流しやがって。エロい匂いがムンムン香ってくるぞ」

吐息がかかるほどの距離まで顔を突き出した若者が、細長い勃起を扱きつつ、興奮でかすれた声をかけてくる。

「くうう、全部挿れたから……早く……早くう〜」

屈辱感に耐え、精いっぱい媚を含んだ声でおねだりしながら、咲妃は赤ペンの寄せ植えで飾り立てた美尻をクイッ、クイッとせり上げた。

「お嬢ちゃんがイッたらって約束だろ？ ほら、最高にエロエロなケツマンコアクメを見せてくれよ！」

「あはあんっ！ イクッ、イクからあ、見てえ、私が絶頂するところ、見てええええ〜！
アッ、ヒッ、イクイクイクイクウウウウ〜ンッ!!」

もはや誘惑なのか、本気で叫んでいるのか自分でもわからぬまま、呪詛喰らい師カリスイーターは思いつき秘部をせり上げて、込み上げるエクスタシーに身を委ねる。

プシイイッ！ プチャアアア〜ッ！

絶頂収縮する秘裂の奥から、愛液とともに透明な潮が噴出し、至近距離で見つめていた男どもの顔を熱く濡らした。

「くううっ、たまんねえイキッぷりだぜ、チンポ、もう限界！ 出るッ！」

「ぶっかけてやるよ。そおら、お待ちかねのザーメンシャワーだぜ！ んむうううっ！
出る……ぞおおっ！」

「じゃあ、私はお嬢さんのお顔にかけてあげよう。綺麗な者を汚すのも芸術だよ……ああ、
数年振りの射精だ！」

「オレ、オッパイがいい！ ああ、こんなエロい娘にチンポ汁ぶっかけできるなんて、夢
みたいだあ！」

フェティッシュな姿で射精をねだる極上美少女の痴態に興奮した客達は、円形舞台で身悶える少女を取り囲み、猛然とペニスを抜き上げて、欲望の煮詰め汁を解き放った。

びゆくんっ！ びゆくびゆくんっ！ びしゃあ！ ぐちゅびちゅびちやびちやびちやびちやああゝッ!!

十数本の牡槍が一斉に脈動し、大量の白濁粘液が神伽の巫女に降り注ぐ。

「くうああ……イツ、イク……うううんッ!!」

感度を増した柔肌にぶちまけられるスペルマの熱さと粘りが、立て続けの絶頂を呼ぶ。

白濁まみれのボンデージボディを、グウウンッ！ と仰け反らせてアクメに舞い上がるカースイーター。絶頂収縮した肛門括約筋が、五本のサインペンを砕けんばかりに締めつけ、ギチュギチュと樹脂の軋み音を上げた。

ギユリッ！ ぬちゆるんっ！ ちゅぽぽんっ！

強烈すぎる締めつけで押し出されたサインペンが、身を乗り出した観客達に向かってロケット花火のように射出される。

興奮の極みに達した男達は、少女のアヌスに咥え込まれていたペンを奪い合い、腸液に濡れたペン軸を嗅ぎ、貪るように舐めながら射精直後も萎えぬ勃起を激しく扱き上げた。

「くおおおっ！ また、出るぞおおお！」

「あはあああ！ 射精イイイイイッ！」

ずびゆるろろろろおお！ びゆくびゆくびゆるうううううっ！ ビキュビキュビキュ

ンッ！ バシヤバシヤバシヤビチャアアアッ！

射精を上回る激しさで脈動したペニスから、水銀状の液体金属が噴水のように迸り、精液に汚された少女の全身を白銀の彫像さながらに覆い尽くす。

「はあう！ んきゆううう……あああ、また、中に……来るんふううッ！」

男達の淫熱で温められた液体金属が、尻たぶを滑り、アヌスの小皺を洗いながら、肛門にズルズルと侵入してくる。尻だけではない。膣口以外の穴という穴に水銀状の淫神は潜り込み、新たな依り代の全身へと浸透してゆく。

喘ぐ口、鼻孔、耳穴、左右の乳首、下半身では尿道口と肛門に、大量の液体金属がジュルジュルと流れ込んでくる。

精液よりもはるかに比重の重い淫神は、ほんの少しの間、侵入した臓器の内部で蠢いていたが、直に質量を失い、霊気と化して肉体に解け込んだ。

「はあああんっ！ また、イクッ、イツちやううっ！ んはああああッ！」

全ての神経を快感電流が駆け巡り、ノンストップでイキ狂う少女の秘裂から、射精のような勢いで愛液が迸る。

「あ……ああ……」

妖銀貨を全て取り込み終えた神伽の巫女は、精液にぬめった舞台に前のめりに突っ伏し



て、ボンデージボディをわななかせる。

「くううう……滾る……血が……我が肉体に融合したネメシスが……お前の痴態と快感に沸き返っているぞ、カースイーターア!!」

キイイイイイイイイイイイッ!!

普段のクールな物腰を一変させたミユスカが叫ぶと同時に、スペルマの臭気が満ちた劇場内に、甲高い金属音が響いた。

男装の麗人が着用していた純白のスーツが水銀状に溶け崩れ、肉体にピッチリと密着したコスチュームに変わる。

妖銀貨のスレンダーボディを包んでいるのは、メタリックな光沢を帯びたレオタードのような衣装であった。程よく筋肉質な美脚と両腕も、ロンググローブとブーツ状のコスチュームに覆われ、身体の所々に鎖状の飾りがあしらわれた、ビザール系のいでたちだ。

「クククッ、この姿になるのは何年振りかな？ ああ、この高揚感、堪らないぞ」

恍惚の表情を浮かべた妖銀貨は、獲物に迫る牝豹のように四つんばいになり、舌なめずりしながら舞台上に這い上がってくる。

「くう……妖銀貨……このゲームは私の勝ちのはず。まさか、暴走したか!？」

舞台上で動けぬまま、咲妃は呻く。

（イケないのがこんなに辛いなんて……ああ、脳が煮えたぎってしまいそうだ！）
 神伽の戯においては、奔放に乱れることで、淫神を昂らせてきた豊かな性感が却って仇となつて、囚われの巫女を悩乱させる。

ギチッ、ギユリッ、ギチギチギチュルッ！

深紅の革帯が軋みを上げて色白な裸身を締め上げ、生殺しの陵辱が飽くことなく続く。

「んくふううう！ うあ、はぐううううッ!!」

疑似淫魔と化したボンデージは、緊縛女体を絶頂に到達する寸前まで追い込んで焦らし抜いた。

「はああんっ、やつ、もう……もう……くあ、きゅふううッ！ アッ、くはあ……はあはあはあ」

数知れぬ寸止め絶頂で着用者を黜り抜き、淫魔ボンデージの蠢きはようやく動きを止める。

生殺しからは解放されたものの、緊縛を弱めた革帯から、張り詰めた爆乳がこぼれ落ち、秘裂に啜え込んだままの革帯の脇からは、白濁した愛液を滴らせた痴態をさらして喘ぐばかりの状態である。

(身体が疼いて……敏感になりすぎている)

延々と責め抜かれたその肉体は絶頂に餓えて、狂おしいほどに発情させられていた。

「八時間……。ずいぶんカルマを溜め込んでいたのねえ。これだけ焦らされたら、並の退魔士なら、とつくに精神崩壊しているレベルだけど、さすがね……。それじゃあ、第二段階に進みましょうか。お待たせ、あなた達の出番よ」

障子戸を開けて、三つの人影が入室してくる。

「ウフフフッ、お久しぶりね。アタシ達が、たーっぷり可愛がつてあげるわよお、カースイーター」

色気過剰な褐色ボディをビザールファッションに包んだ淫女、ゼムリヤが淫蕩な笑みを浮かべる。

「咲妃さんのおかげで復讐も果たし、淫神の呪縛からも解放されました。今宵はお礼に、技巧を尽くして気持ちよいうして差し上げます」

妖系使いの退魔尼僧、阿絡尼が、京訛りの口調で言って艶然と微笑んだ。

「やれやれ、私はまだ疲れているのだが……。だが、カースイーターの甘美な肉体を味わえるというなら、参加しないわけにもいくまい」

つい先ほど、咲妃と激しい神伽の淫戯を繰り広げたミュスカは、いささか焦燥気味の美

貌に苦笑を浮かべている。

「はう……く……見知った顔ばかりだな。九未知会は、意外と小規模な組織なのか？」

肉の疼きに堪えながら、呪詛喰らい師は居並ぶ女達に挑発的な視線を投げかける。

「これがオールスターキャストというわけじゃないわよ。他のメンバー達は、今も世界中で活動しているわ。久遠の目的を成就させるために、ね」

「その目的とやら、そろそろ教えてくれないだろうか？ んふう……く……ッ」

「今はまだダメよ。資格を得てから、久遠に直接聞きなさい。さあ、始めましょうか」

ドクタークリアの目配せを受けたアンノウンス達は、ためらいもなく着衣を脱ぎ捨て、三者三様にエロチックな裸身をさらけ出した。

「もう待ちきれないわ。見てえ、アタシの黒チンポ、もう、こんなにギンギンになってるのよお♪ ンああ……」

ビザールコスチュームの股間をはだけた淫女は、亀頭の張り出しもたくましいチョコレート色の巨根をしゃくり上げつつ喘ぐ。

黒光りする牡器官の先端は、先走りの粘液でネットリと濡れ、血管を浮き出させて張り詰めた肉茎は、鳩尾に届きそうな長大な肉凶器だ。

「ほら。わたくし達も、久遠さんのお力で、ほら、このように立派なモノが……」

「フフツ、さっきのお返しができそうだな」

着衣を脱ぎ捨てて妖艶な声を上げる阿絡尼と、含み笑いを漏らすミュスカの股間からも、淫情の血潮に猛った艶やかなピンク色の肉槍が屹立している。

「く……ンツ、淫ノ根のレプリカか？」

三本の肉槍を目にしただけで、口腔内に込み上げてきた生唾を、ゴクリ、と呑み込んでしまう咲妃。

（身体が……欲しがってしまっている……）

長時間にわたって焦らし責めされた肉体は、暴走寸前の発情状態に陥っているのだ。

「アナタもガマンの限界でしょう？ さあ、快楽の宴を始めるわよお♪」

ペニスをそそり勃たせた美女達が、咲妃の極上裸身に群がってきた。

「先ほどのお返しだ。啜えろ！」

「んぐう！ んむふううん！」

淡いピンク色に充血したミュスカの勃起が、唇を割り開いて喉奥まで突き挿れられる。

（なっ、何だ？ ペニスが、振動している!?)

「フフツ、妖銀貨の力は奪われたが、私の身体には力の残滓が宿っている。快感神経を直接搔き鳴らして、お前の口を性器に変えてやろう」

ニヤリ、と精悍な笑みを浮かべた妖銀貨は、緩やかに腰を使い始めた。微細な振動に包まれたスレンダー美女の勃起が、呪詛喰らい師カリスイーターの口腔を掻き回す。

ぐちゅ、ぐちゅ、ちゅくつ、ちゅくつ、ちゅくつ、ちゅくつ……。熱い亀頭に舐られた舌と、たくましい亀頭冠に擦られた喉粘膜が狂おしいほどに疼き、呪詛喰らい師カリスイーターの肉体を淫欲で燃え上がらせてゆく。

「カリスイーターのケツマンコ、いただきッ！」

咲妃の太腿を抱え上げたゼムリヤは、はち切れんばかりに猛ったチョコレート色の亀頭を尻の狭間にねじ込み、アヌスの蕾を狙ってきた。

（こんな状態で、そこを犯されたら……理性が飛ぶ！ 狂わされてしまうッ！）
抵抗しようとする咲妃であったが、久遠の術式の後遺症か、まだ思うように身体が動かない。

それどころか、欲情した肉体の奥底をゾクゾクするような悦波が駆け抜け、危機感を抱いている心を裏切って、さらに昂りを増してゆく。

「皆さん、急きはりますなあ。では、このオツパイに挟んで……あはあ、ほんま、ええ弾力してはりますなあ。残り物には福がある。んふふふっ♪」

おっとりした口調で告げた阿絡尼は、仰向けに組み敷かれた呪詛喰らい師カリスイーターの爆乳に勃起

を挟み込み、乳肉を揉みこねながら緩やかに腰を使う。

「ふむううんッ！ くふううんッ！ ンッ、ンッ、んふううう！」

熱く猛ったカリのくびれが乳肌を擦り、冷たい指が柔肉に深々とめり込んで蠢く感触だけで、咲妃は絶頂寸前まで追い込まれてしまう。

「この革帯、邪魔ねえ。……こんなに深く食い込んで、苦しいでしょう？ 楽にしてあげるわ」

「くあ！ うあああうッ！」

股間に食い込んだ退魔装束が、ゼムリヤの手で強引にずらされ、秘部を剥き出しにされた。熱く濡れそぼった膣口と肛門が物欲しげに収縮して、陵辱者の興奮を煽る。

「ウフフフフ、もう濡れ濡れじゃないの。ああ、綺麗なピンクの美味しそうなアヌスちゃん、アタシのとおっておきのチンポ技で犯してあげる♪」

欲情に上ずった声を上げた褐色肌の淫女は、股間にそそり勃つ褐色の肉槍に手を添え、何やら呪言を唱える。

「……この身に宿りし低級霊達よ、我がペニスを依り代として、受肉せよ！ ……んあ、来たわあ。はああ、出てくるわよお！」

張り詰めた肉茎の表面がポコポコと波打ち、小さな人の顔がいくつも浮き出してきた。

どの顔も、酸素不足の金魚のようにパクパクと口を開閉させ、白濁した唾液にぬめった紫色の舌を突き出してせわしくねらせている。

(ペニスを依り代に死霊受肉とは、悪趣味な……あんなので黽られたら……)

グロテスクな人面ペニスを見せつけられた咲妃の背筋に、悪寒とともに妖しい期待が走り抜ける。

「すごいでしょ？ これでアナタのケツマンコ、狂わせてあげるわあ！」

ぬぷ……ぐぶぐぶつ、ぐぶつ、ずぶぶぶッ！

瘤状に浮き出た顔で肛門括約筋を掻き弾きながら、異形の妖勃起が少女の直腸に挿入された。巨根に浮き出た顔は、熱く潤んだ粘膜に吸いつき甘噛みを仕掛け、小さな舌を閃かせて、美少女の尻穴を内側から貪る。

「ヒいいいッ！ 中、吸われて……つあああつ！ かつ、噛むなあ！ あああ、噛みながら、舐めて……ひぐううううッ!!」

直腸壁を吸いしゃぶられ、肛門括約筋の菊リングをコリコリと噛み責められた神伽の巫女は、口を犯すペニスを吐き出して悶え狂ってしまう。

「ああああ、いつ、いいわあ。これ、気持ちよすぎて、すぐにでもイッチャイそうよお！
カースイーターのケツマンコ、最高ッ！」

狂喜の笑みを浮かべたゼムリヤは、褐色の尻たぶを躍動させ、容赦のない腰使いで美少女退魔士のアヌスを抉り抜いた。

「うあ、ひぐつ！ アッ、あんツ！ 壊れるツ、そんなに激しくするなあ！ くああ、すつ、吸われてるツ！ んきゅううんツ！」

荒々しい抽挿で、小さな口に吸いつかれた直腸粘膜が引つ張られ、内臓が引きずり出されてしまいそうな抽挿快感が呪詛喰らい師を襲う。

仰け反りわななく咲妃の胸では、阿絡尼の熱く堅い肉刀が乳房を突き刺り、勃起乳首が繊細な指使いで責め立てられている。

「ほんまにええオツパイですなあ。はんなりと柔らかかで、大きゅうて……ああ、オチンチンが蕩けてしまいそうですわあ」

尼僧の頭巾と白足袋以外は全裸というフェティッシュな姿で、妖艶な熟女は丸く張り詰めた尻を揺らし、硬度の高いフタナリ勃起でたわわな果肉を犯す。

「お乳の奥も、可愛がって差し上げますえ」

勃起乳頭を弄っていた阿絡尼の指先から、何百本もの細い糸が紡ぎ出され、母乳の分泌孔である乳腺へとプツプツと潜り込んでくる。

「んんんツ!? ひう、あひいッ、やつ、ああん」

エクトプラズムで紡がれた妖糸は、母乳の源泉にまで侵入すると、微振動に小刻みなストロークを織り交せて、爆乳を内部からくすぐり嬲った。

肉果の奥で渦巻いていたむず痒い圧力が急激に強まり、乳首の芯を灼熱させて一気に込み上げる。

「うくう、出る……ッ、ひゅああああンッ！」

ぴしゅっ！ プシッ！ ふびゆるるるッ！

甘い悲鳴を漏らして爆乳を仰け反らせた咲妃の勃起乳頭が、純白の乳汁を噴水のように噴き上げた。

「あはあ、温かいお乳が出ましたわあ。もつともつと搾り出してあげますえ♪」

顔にまで飛び散ってきた少女の乳汁を恍惚の表情で浴び、舐め取った尼僧は、さらに激しく乳房を揉みこね、内部に侵入させた妖糸を震わせる。

（あああ、胸が……弾けるッ！ 母乳が止まらない、全部、搾り出されてしまうッ！）

まるで小さなペニスのように脈動した乳先から、男子の射精をも凌駕するめくるめく放出快感を置き土産にして、純白の噴水が高々と噴き上がる。

「おい！ お口の動きがおろそかになっているぞ。もつと舌を動かしてみろ！」

イラマチオの快感に酔った妖銀貨は、クールな美貌を歪めつつ、筋肉質なスレンダーポ

ディを躍動させて、喉陵辱の速度を増してゆく。

グチュグチュと唾液の鳴る音を立てて喉粘膜を掻き擦り、食道にまで侵入して快感神経を掻き鳴らしてくるミユスカの男根は、触覚だけでなく、味覚や嗅覚、そして聴覚までも淫悦に蝕んだ。

(ダメ……だ。抗えない……蕩ける……)

「はう……んあ、ちゅぽっ……くふうん……れるっ……ちゅぱ……ぴちゃぴちゃぴちゃ、はああ、あむ、んっんっんっ」

咲妃は、堅く反り返った勃起の根本から先端まで舌を這わせ、唾液と先走りに濡れ光る肉槍をうっとり眺めては、再び口腔内に呑み込み、激しく頭を振りたくりながら頬をすぼめて吸い上げる。

舌や口腔粘膜が、熱く猛ったフタナリペニスにネチネチと擦られると、気持ちよすぎて意識が飛んでしまいそうだ。

(口だけじゃない、身体の感度が……どんどん上がって。ああ、狂ってしまうッ!)
焦らし責めで欲情した肉体に魔性の愛撫を施されると、全身が剥き身のクリトリスになつてしまったかのように鋭敏化して、ありとあらゆる刺激を快感に変換してしまう。

搾乳の快感が爆乳のみならず、肺や心臓まで歓喜に震わせ、アヌスを貫き、直腸奥まで

突き挿れられる人面ペニスの衝撃は、内臓全体をビリビリと揺さぶって頭の芯まで痺れさせる。

三人のフタナリ美女に蹂躪された呪詛喰らい師は、絶え間ない悦波に翻弄され、白目を剥いて痙攣することしかできない。

「オッパイの中も、犯して差し上げますえ♪」

妖艶な声を上げた阿絡尼は、乳腺内に侵入させた妖糸を小さなペニス状に編み上げると、乳房を内側から突き上げ、掻き回した。

「くふう！ くんぐふううむ!! ンッ、ひぐつ、うううンッ！ きゅふううンッ！」

くぐもった声を上げる咲妃の爆乳が、内部からのハードピストンで縦横無尽に揺れ弾み、喉とアヌスで妖根が抽挿される。

「ダメえ、もう限界よ。チンポ弾けそうッ！」

狂ったように腰を使っていたゼムリヤが、情けない声を上げて身を強張らせる。

「私もだ！ ……阿絡尼、三人同時に出すぞ！」

「心得ました。さあ、最初のお汁、出しますえ」

肛門と喉、そして乳房を犯す肉茎の動きがフィニッシュに向かって加速してゆく。

（あああッ！ 弾けるうッ!!）



「よきお声。お口も賞味させていただきます」

人狼の舌が、喘ぐ少女の口腔にズルリと挿入され、喉奥まで舐め回す。

「んふむうう、ゴホッ、んふ、あふう……んちゅ、くちゅ、くちゅ、んぐ、ちゅぱ、ちゅぱ、んふ、ゴホッ……んぐう……ぐちゅ、ぐちゅ、ずちゅ……じゅぶるっ……」

ミユスカの妖根で性感を増幅された口腔を獣の舌に蹂躪された咲妃は、生臭い味覚器官に自ら舌を絡め、頬をすぼめて吸い上げた。調子に乗った狼男は、咲妃の口だけでなく、顔中に舌を這わせ、こびりついた美女の精液を残らず舐め取りながら、獣臭い唾液で美貌を汚し抜く。

なされるがままに嬲られている咲妃の腹部は、ヴォルフの大量射精でポッコリ妊婦のように膨らまされている。

「あらあら、ケツマンコにロッキング射精しながらディープキスなんて、アンタも本気モードね。アタシ達もそろそろ復帰するわよお」

人狼に犯される咲妃の痴態に興奮したゼムリヤ達が陵辱の宴に戻ってきた。

「かしまりました……」

身を起こしたヴォルフは、アヌスを占拠した獣根をゆつくりと抜きにかかる。

「ひぎいいいんっ！ お尻ッ！ 裂けるッ！ つあああ、くわああああんっ!!」

ボール状に膨らんだ男根の基部がアヌスを内側からこじ開ける激痛に、狂乱する咲妃。
「もう一息故、ご辛抱を……グルルルッ！」

獣人は、異形のペニスを一気に引き抜いた。

ジュポンッ！ ぶびゅうううッ！ ぶちゆるるるッ！ ぐびゆるるるッ、ずろろろろろ
おお〜ッ!!

「アッ、やつ、出ちゃウツ、漏れちゃウツ！ あ、あああ、やはああ〜ンッ!!」

恥悦の泣き声を上げる呪詛喰らい師のアヌスから、ゼリー状に凝り固まった獣のスペル
マが大便さながらにズルズルと排泄され、ベッドシートの上でうねる。

「あらあら、中出しザーメンウンチ大噴火ねえ。ますます昂ってきちゃったわあ♪」

三人のフタナリ美女と一頭の獣は、辱悦にすすり泣く神伽の巫女の身体を貪るように責
め立てる。

「せっかく生やしはったんですから。ここを可愛がつて差し上げましょ♪」

柔和な口調と微笑みの奥に、ゾクリとするようなサディスティックな響きを秘めた阿絡
尼は、咲妃の股間でヒクついていているピンクの肉柱に指を絡めてきた。

「ひあ！ はああンッ！」

ひんやりと冷たく滑らかな尼僧の指に敏感な勃起を愛でられた呪詛喰らい師は、悩まし

げな声を上げて仰け反ってしまおう。

「あはあ、ビクビク跳ねて、可愛らしいですなあ。本物の淫ノ根、じつくりと検分させていただきます」

硬く反り返った肉柱のカーブに沿ってくすぐり昇ってきた指先が、張り詰めた亀頭を撫で回し、既にガマン汁を滲ませている先端の切れ込みに、ヌプツ、と潜り込む。

「くひいいんツ！ なっ、中に……入って来る!!」

射精経路を逆行して何かが侵入してくる壮絶な快感に、咲妃は引きつった声を上げて悶え狂う。

「わたくしの糸で、咲妃さんのオチンチンの中を探らせていただきます。ああ、やつぱり本物は違いますなあ」

数十本の糸糸を編み込んだ責め縄をフタナリペニスの内部に送り込みながら、阿絡尼は妖艶な笑みを浮かべる。

美少女勃起の根元のさらに奥、神気を精液に変換する魅惑の器官にまで到達した妖糸の縄は、そこで細かくほつれ、内部をサワサワとくすぐり責めながら検分する。

「ひぎいいいッ！ やはああんっ！ やっ、らめええ！ 中ッ、中、掻き回されたら！ 出ちゃ……うううッ！」

ペニスの芯と、恥骨の裏側を無数の細筆で搔きくすぐられているかのような魔悦に屈したフタナリ美少女は、身も世もない絶叫を上げて射精絶頂へと舞い上がった。

「まだまだ出したらあきませんえ！」

激しい声を上げた阿絡尼の妖糸が、ペニスの奥でギチッ！と絡みあい、糸球を形成して射精経路を封じる。

「くわあ！ あっあっアッ！ 出……ないっ！ 射精してるのに、出ないいいいいンンッ!!」

艶やかな薄紅色に充血した淫ノ根をビクンビクンと跳ねさせながら、射精封じされた呪詛喰らい師は生殺しの絶頂に泣き乱れてしまう。

「もつと奥の方……感度増幅と、射精量増大のツボに、私の神気、注入してあげますえ……」

出すに出せない絶頂に跳ね狂う淫ノ根のさらに奥、依り代である咲妃でさえ実感していなかった部位にまで届いた妖糸は、サワサワとくすぐるように蠢きながら神気を放ち、ただでさえ敏感、絶倫なフタナリ神をさらに活性化させてゆく。

「アッ！ あああっ！ 中で、精液が増えてルッ！ くうううンッ！」

切羽詰まった声を上げるフタナリ美少女の勃起の根元が、急激に量を増した精液に押さ

ナインアンノウンス
九未知会のメンバー達は、迸る白濁を競いあうように裸身に浴びて、欲情をさらに加速させてゆく。

「フタナリチンポの尿道責め、アタシもやろうと思ってたのに！ まあいいわ。アタシは、これ使っちゃうから♪」

ゼムリヤが、褐色の指に摘まんでいるのは、表面に、波打つような凹凸が形成された、直径一センチ足らず、長さ二十センチほどの金属棒であった。

「ハアハアハアハア……なっ、何だ、それは!？」

大量射精の余韻に喘いでいた咲妃は、ギクツ、と美貌を強張らせる。

「これ、ブジーっていう責め具なのよ。男も女も、コレを尿道に入れて、快感に狂わせてあげるの……」

まだ射精脈動の止まらぬ咲妃の勃起を無造作に掴んで動きを封じた褐色淫女は、鈴口の小穴に、金属棒をゆっくりと挿入してゆく。

「つぁ！ ひぎいッ！ くひいいいッンッ!!」

ジンジンと疼き昂り、甘美な脈動が止められぬペニスの芯に、硬質な異物感がヌプヌプと潜り込んでくる痛悦入り混じった異様な快感に、呪詛喰らい師の裸身が強張る。

「どう？ チンポの中犯されるのって、堪らないでしょ？ この痛痒い違和感が、すぐに

快感に変わるのよ」

二十センチ近い責め具の根元近くまで美少女ペニスの奥に挿入しながら、ゼムリヤは淫蕩な笑みを浮かべる。

「もちろん、これはただのブジーじゃないわ。何百人もの少年少女に未知の快感を与え、その絶頂感を残らず吸い取らせた呪具……アナタに耐えられるかしらね？」

ヌロツ、と舌なめずりした淫女は、責め具の根元をゆっくりと左右に捻りつつ、勃起の胴に絡めた指で、手コキ責めを仕掛ける。

「くうわああああンツ！ やつ、中ツ、らめえええ！ イクツ、イクツ、やはああんっ！
ぬっ、抜いてええ！」

繊細な粘膜管を振れさせる責め具から発生する妖波動と、緩急付けて勃起を抜き立てる褐色指の辱悦の相乗効果で、呪詛喰らい師は射精を伴わない絶頂を延々と与えられた。

「いいっ！ いいわあ。カーズターのチンポ、ずーっとビクビク震えて……あああんっ！
堪らないわあ」

淫欲の塊のような美貌を蕩けさせながら叫んだゼムリヤは、尿道責め具を左右に捻り、苦しげに脈動し続けるフタナリ勃起を抜き立て、張り詰めた亀頭に舌をヌロヌロと這わせ、堪能する。

「出したいなら、さつきみたいに、思いつきり射精して、その勢いでプジーを押し出しなさい♪」

ビクビクと脈打つ勃起を根元から先端まで舐め上げながら、褐色肌の淫女は張り詰めた亀頭に嘔きかける。

「く……んぐむううんつ！ あ、あああ、出るツ、くうううんツ！ しゃ、射精ツ！」
カクンツ、カクンツ！ と腰をせり上げ、絶頂に舞い上がった神伽の巫女は、射精管内を蹂躪している責め具をザーメンの激流で押し返した。

ぬぷつ……ぬぷりゆりゆつ！

甘美な脈動に包まれた美少女勃起の中から、ステンレス製のプジーが、数センチ、押し出されてくる。

「あはあんつ！ ダメよお〜」

意地悪な声を上げたゼムリヤは、押し出された責め具に親指の腹をあてがい、グイツ！と押し込んでしまう。

「くわあああ〜ンンツ！ ヒツ、やつ、あはあああ〜ンンツ!!」

プピュルルルルルル〜ツ！ プシユルルルルツ！

悲痛な中に、あからさまな歡喜の震えの混じった悲鳴を上げる呪詛喰らい師のペニスか

ら、断続的に白濁液が噴き上がる。

プジャーで塞がれた射精経路を強引にこじ開けてせり上がってきた精液が、責め具を押さえる指先を振り払わんばかりの勢いで噴き出ているのだ。

「ひぎぎいいんっ！ くあ……あぐうううんんっ!!」

「あらあら、すごいわねえ。ザーメンの勢いが強すぎて、指が痛いぐらいよ。あふ、じゅるっ、ずちゆるるっ。ゴクンッ……カースイーターのチンポ汁、美味しい♪」

鈴口に挿入された責め具の周囲から、円錐状に噴き上がる美少女の精液を褐色の美貌に受け止めたゼムリヤは、熱く濃厚なぬめりを貪るように啜り込む。

「ほらほらあ！ チンポの中、もつと掻き回してあげるわあ！ 気が変になりそうならいきもちいいでしょお？」

「ひぎいいんっ！ やっ、ヒッ、はあああぁんっ！」

射精中のペニスに挿入したプジャーを激しくこね回しながら、超淫乱モードのゼムリヤは、過剰な刺激により悶えるカースイーターのザーメンシャワーを堪能した。

「んふう……このままずっと続けていきたいけど、ミユスカが焦れてるから、ちよつとだけ交代してあげるわ」

数十分にわたって内外からのペニス愛撫を楽しんだ褐色淫女は、名残惜しげにプジャーを

引き抜いてゆく。

「ふああ……あはああ……ッ！」

射精の余韻でジンジンと甘く痺れるペニスの芯をズリズリと擦りながら抜け出てゆく責め具の感触に、無意識のうちに尻をせり上げてしまう咲妃。

「抜けたわあ。カースイーターの体温で熱々になって、ザーメンの味が染みついて、美味しい……。この温もりが残ってるうちに、アタシのチンポに入れちゃおうっ」と

プジョーをヌロヌロと舐め回しながら言ったゼムリヤは、少し離れた場所に座り込むと、褐色勃起にプジョーを挿入してオナニーに耽り始めた。

「阿絡尼もゼムリヤも酷なことをする……。だが、私も容赦するつもりはないぞ。妖銀貨の溜め込んだ業を祓ってくれた礼に、たっぷりと快感を与えてやろう！」

散々精液を搾り出されてもなお、勃起を際立たせたままのフタナリペニスをしゃくり上げている咲妃を組み敷いたミユスカは、自らのフタナリ勃起を淫ノ根に押しつけ、ダイナミックに腰を振り始めた。

ぬちっ、ぬちゅっ、ぐりゅっ、ぎちゅぎちゅぎちゅっ！

絶頂中のペニスに、硬く熱く猛った美女の勃起が押しつけられ、激しくせめぎあう。フタナリ美少女と美女の、禁断の兜あわせ行為だ。

「ひいいんっ！ やっ、いっぱいイッたばかりで、感度が……あはああんっ！」

感度が増しすぎて狂おしいほど敏感になっている亀頭に、ミユスカの亀頭がグリグリと押しつけられ、甘い余韻に震える射精経路、たくましく張り詰めた肉柱が圧迫しながら何度もなぞり上げる。

「イッ！ ヒッ、やああんっ！ らめえええ、擦っちゃ、押しつけちゃ、はああああああんっ！」

「いいぞっ！ その声、その表情！ 血が滾るッ！」

甘い悲鳴を上げて仰け反る咲妃の絶頂ペニスに、ミユスカの勃起が容赦なく擦りつけられ、さらなる喜悦の頂点へと追いつけてゆく。

「あはあ、お前の絶頂と、苦悶を越える快感が伝わってくるぞ！ 行くぞ……私の……金属精液を受けろッ！」

フタナリペニス同士の激しい摩擦で昂ったミユスカは、クールな美貌に恍惚の表情を浮かべて射精を開始した。

びゅくんっ！ びゅくびゅくびゅくどぶううっ！ どぶどぶどぶううっ！ びちゃんっ！ びちやああ！

歡喜の震えを起こすフタナリペニスから迸ったのは、水銀のような液体金属であった。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

『Brandish』コンビが贈る
最新刊!

コミカライズも
発売中!

カースイーター

Curse Eater

呪詛喰らい師

NOW ON SALE!

【原作】Rusty Soul 【漫画】或十せねか 【原案】蒼井村正

ライトノベルのドキドキじゃ満足できないアナタに送る官能小説雑誌!

妄想最前線を疾走する非現実系・不思議Hコミック誌!

正義の乙女が犯され、敗北絶頂をキメるアンソロジー!!

【偶数月】
隔月発売
2-4-6-8-10-12月

【奇数月】
隔月発売
1-3-5-7-9-11月

【電子版】
毎月配信
書籍版は奇数月
発売!



二次元
**ドリーム
マガジン**
2D DREAM MAGAZINE

コミック O.M.I.C.
UNREAL
オミカ

敗北乙女
エクスタシー
EXS

あなたのキモチイをお手伝い!キルタイムのアダルトコミック誌
全国の書店・各種通販サイト、およびダウンロードなどで好評発売中!

電子書籍版も
好評発売中!

二次元ドリームノベルズ

全巻収録
100%
豪華
イラスト

日常に密着したエロス、リアルな舞台設定で送る官能小説レーベル!

小説家になるこの男性向けサイト「アークターシンノベルズ」から書籍化!

姫騎士 クラスメイト!

戦うヒロインを屈服させちゃうかなり過激な陵辱系ライトノベル!



リアルドリーム文庫

ビギニングノベルズ

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ

あなたはどのタイプ?

あとみっく文庫

呪詛喰らい師

あの人気作品の外伝作品もあり! 電子書籍でしか読めないオリジナル

フリーダム120%!? ジャンルにとわれないドキドキラブ!

4年連続ベストセラー
100%
豪華
イラスト

二次元ぷち文庫



二次元ドリーム文庫